

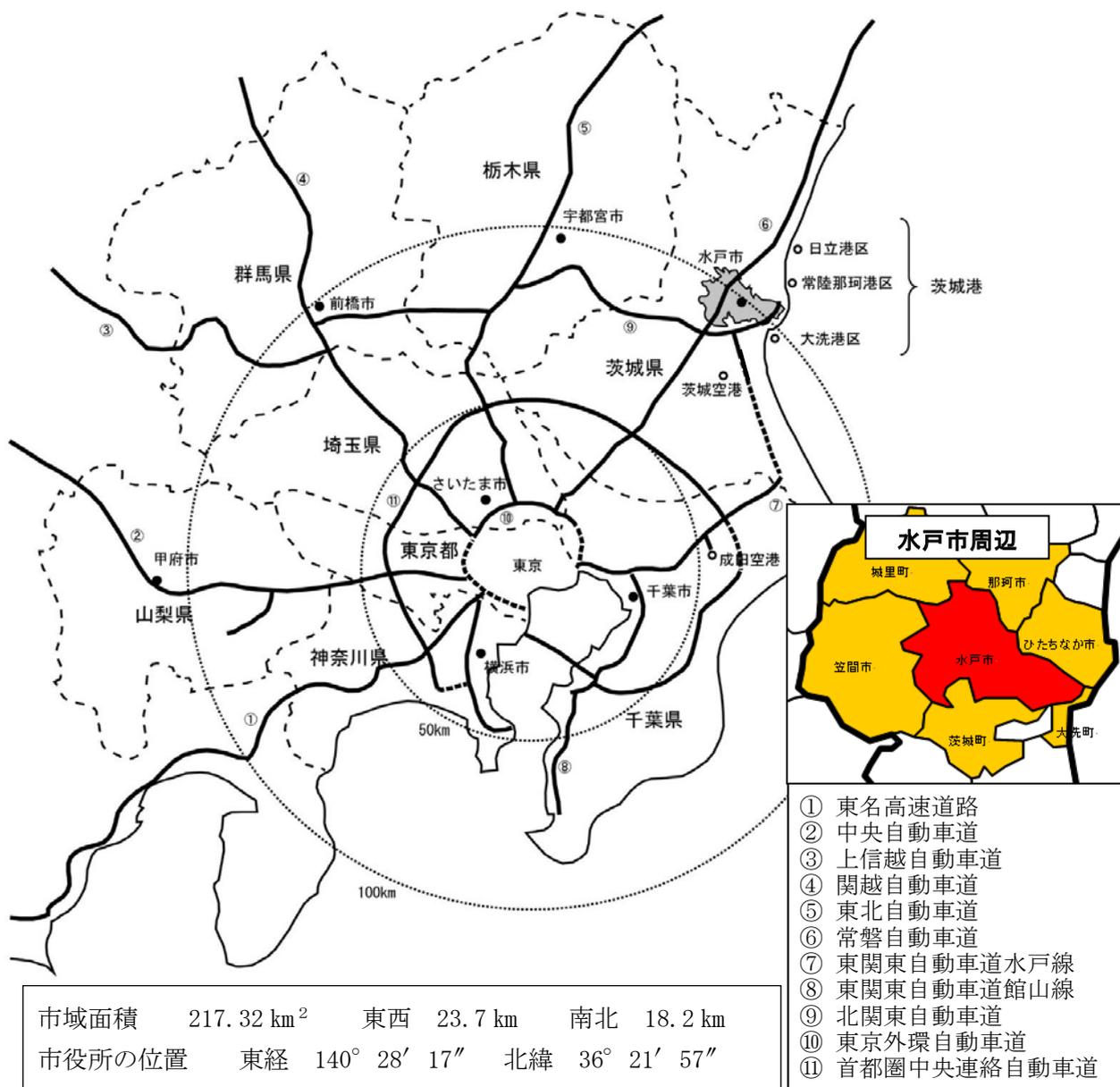
第1章 歴史的風致形成の背景

1 自然的環境

(1) 位置

本市は、首都東京から約 100 km の距離にあり、関東平野の北東端に位置する茨城県の県庁所在地です。市域の北側は那珂川を隔てて、ひたちなか市や那珂市に接しており、東側は太平洋に面する大洗町に、南側は茨城町に、西側は笠間市、城里町に接しています（図 1-1 参照）。

図 1-1 首都圏における本市の位置



(資料：「水戸市第6次総合計画ーみと魁プランナー」及び「平成30年版水戸市の概要」)

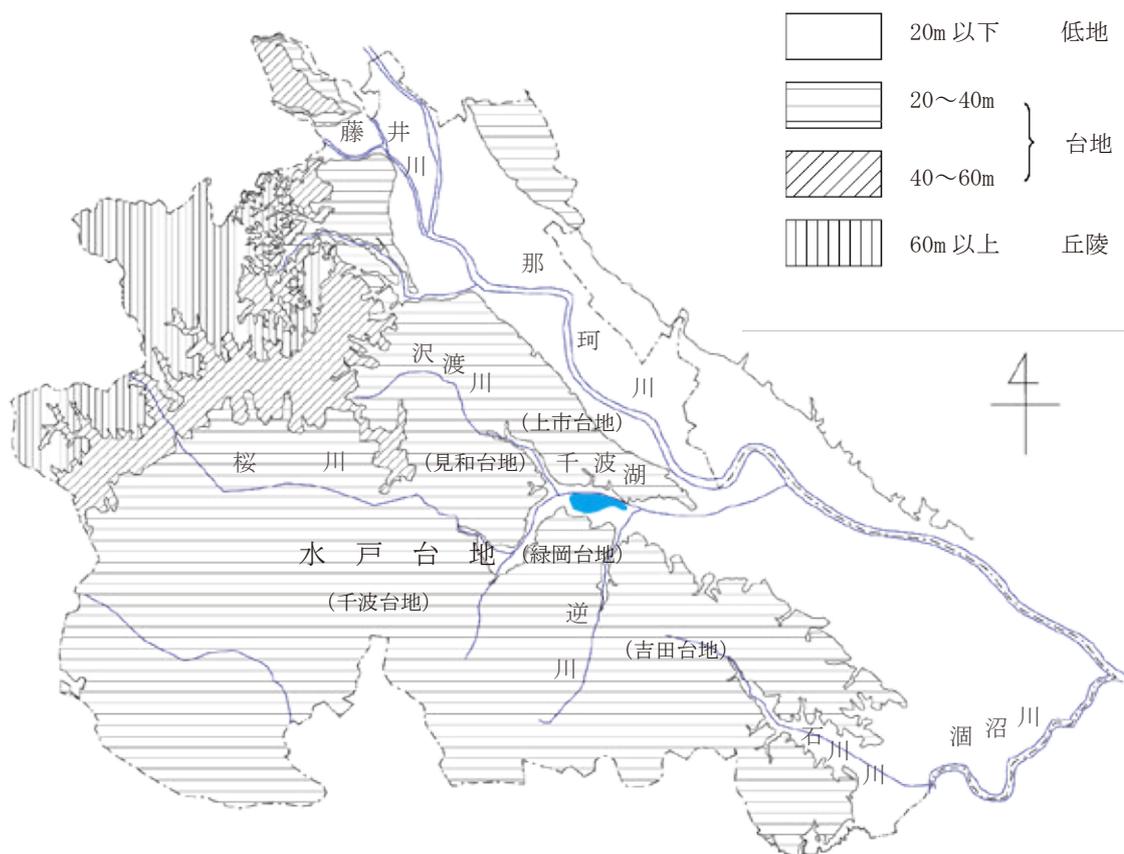
(2) 地勢

ア 地形・地質

本市の地形は、那珂川とその支流の桜川沿岸の沖積層の低地地区、東茨城台地の北東部をなす水戸台地（^{うわいち}上市台地、千波台地等）と呼ばれる洪積層の台地地区及び八溝山地の中央部に当たる^{とりあし}鶏足山塊の外縁部をなす第三紀の丘陵地区の三地形区に分けられます。

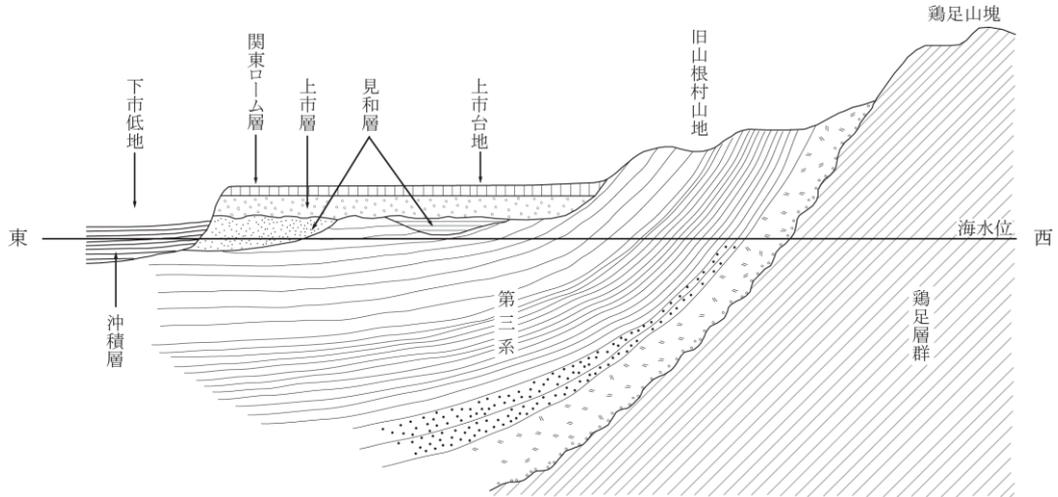
低地地区は、那珂川を挟んで東西に伸び、^{しもいち}標高 0.1～10mで、^{しもいち}下市及び水戸駅南地区の市街地を除いては水田地帯となっています。市の中央から南部にかけて広がる台地地区は、標高 30m前後で、市街地が広がる一方で、畑作農業も盛んに行われています。特に那珂川の低地と桜川の^{しんしよくこく}浸食谷に挟まれた狭長な上市台地には、商業・業務機能を持つ中心市街地が形成されており、その東端は水戸城跡となっています。また、西北部の丘陵地区は、標高 100m前後で、森林公園やかたくりの里公園等があり、豊かな緑地地帯となっています。（図 1－2、3 参照）

図 1－2 水戸市の地形図



（資料：平成 30 年版水戸市の概要に加筆）

図 1-3 水戸市周辺の模式地質断面図



(資料：平成 30 年版水戸市の概要)

イ 河川等

本市は、千波湖や那珂川をはじめとする多くの河川、湖沼、湧水源に恵まれており、その周辺に広がる樹林地や斜面緑地と相まって、市街地と水と緑の自然環境が織り成す潤いのある都市環境を形成しています。

千波湖は、都市化に伴う水質汚濁を防ぐため、これまでに^{しゅんせつ}浚渫事業の実施や、那珂川からの清浄水の導水や流動促進装置による浄化が行われ、改善を図っています。また、市街地を流れる沢渡川や逆川をはじめとした中小河川の水質も、公共下水道の普及等により年々改善されてきているところです。こうした取組もあり、ここ数年、桜川や逆川でサケの遡上^{さけのぼり}が確認されるようになり、サケの帰ってくる美しい河川を守り育てようと、多くの市民が清掃活動や環境学習等を行っています。

(3) 気候

太平洋岸式気候に含まれる関東気候区の北東部に位置する本市では、2月になると梅の花が咲き始め、春の気配が感じられるようになり、3月中旬から本格的な春を迎えます。この時期に毎年「梅まつり」が開催されています。

4月上旬には桜が開花しますが、平年では八十八夜はちじゅうはちや(5月2日前後)ごろまで霜が降ります。しかし、5月上旬には日中の気温も20℃を超え、初夏らしい気候になります。

6月から7月にかけては梅雨の季節となり、梅雨が明ける7月下旬から8月末までは北太平洋の高気圧におおわれて盛夏となります。

秋は台風が来襲することもあります。しかし、大雨が続いて那珂川や中小河川が氾濫はんらんすることもあります。

10月から11月にかけては、大陸から移動性高気圧が周期的にやってきて晴天をもたらすとともに次第に寒くなり、初霜、初氷をみるようになります。その後、北西の季節風が本格化するようになり、市内の千波湖や大塚池には、シベリアから白鳥が飛来します。

本市の厳寒期は1月中・下旬で、最低気温は平均では-2℃くらいですが、年によっては-10℃くらいまで下がることもあり、凍結により水道が被害を受けることもあります。また、雪は12月末から3月にかけて、低気圧が日本の南岸を発達しながら通過するときに降ることがありますが、積雪は余り多くありません。

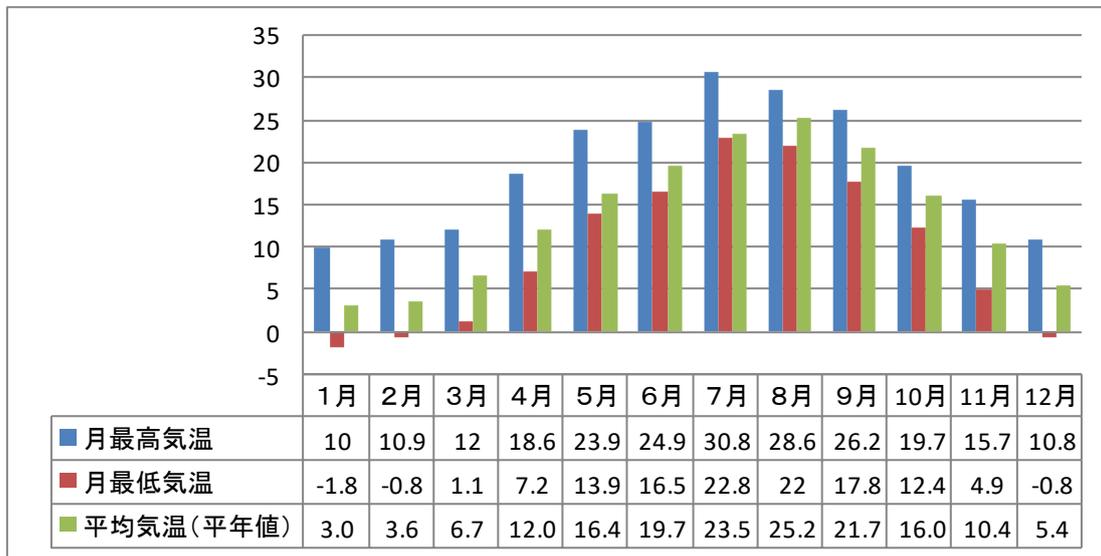
1年を通してみた場合、本市の平均気温(平年値:1981(昭和56)~2010(平成22)年の30年平均値)は13.6℃で、年間降水量(同)は1353.8mmとなっています。本市では気象災害は少なく、寒さのやや厳しい冬の季節を除くと、気候は比較的温暖であるといえます(図1-4, 図1-5参照)。



大塚池に飛来する白鳥

図1-4 月別平均気温・最高気温・最低気温

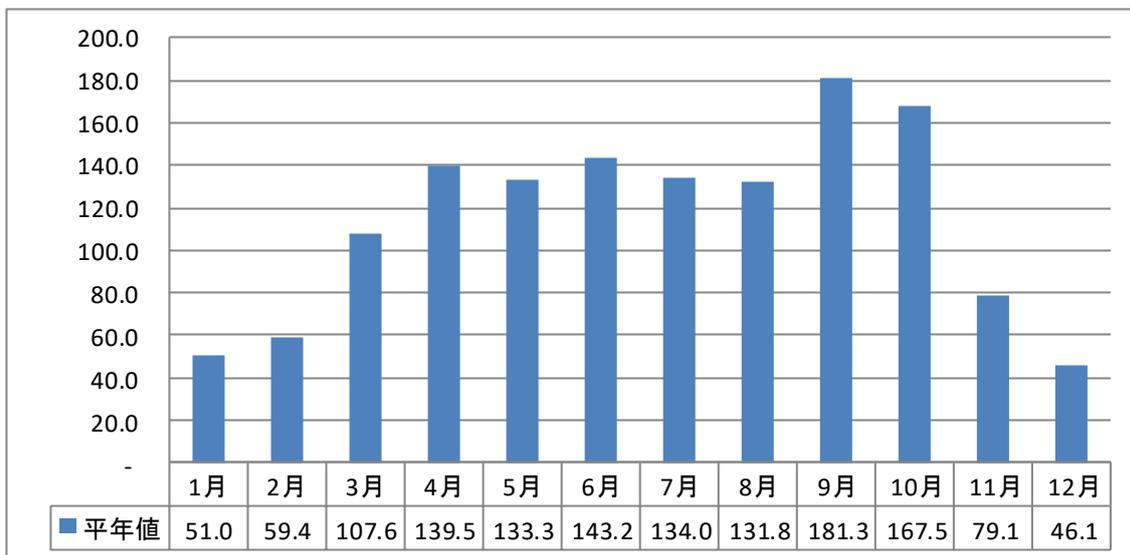
(単位：℃)



参考) 2018 (平成30) 年4月1日現在, 水戸の過去最高気温は1997 (平成9) 年7月5日の38.4℃, 最低気温は1952 (昭和27) 年2月5日の-12.7℃である。平年値は1981 (昭和56) ~2010 (平成22) 年の30年平均値である。
(資料: 水戸地方気象台)

図1-5 月別降水量

(単位: mm)



参考) 平年値は1981 (昭和56) ~2010 (平成22) 年の30年平均値である。
(資料: 水戸地方気象台)

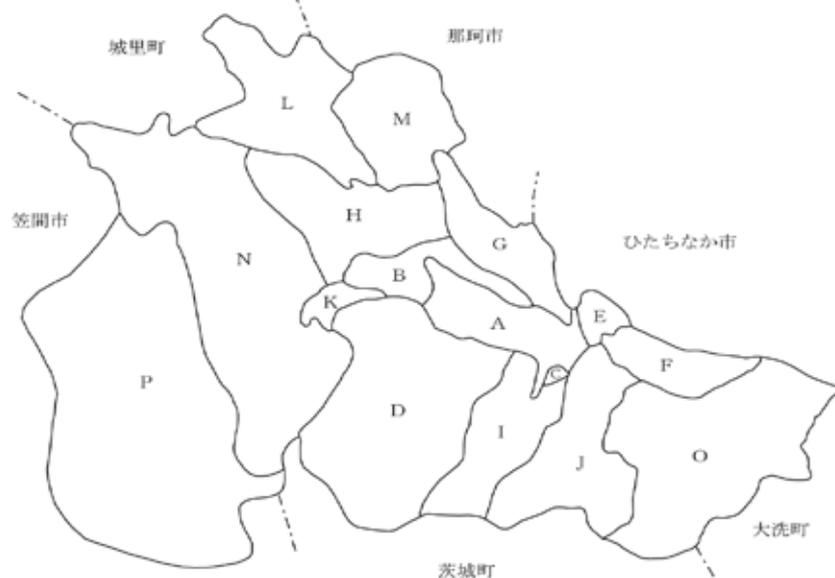
2 社会的環境

(1) 市の沿革

本市の成立は、1889（明治22）年4月1日の市制施行にさかのぼります。明治維新後に廃藩置県が行われ、水戸藩は水戸県となり、続いて茨城県と改められました。当初は東茨城郡に属していましたが、1889（明治22）年4月1日に、上市と下市のほかに、常磐・細谷・吉田・浜田4か村の各一部を合併して、水戸市が誕生しました。日本で最初に市制施行した31市のうちの一つでした。

さらに、1933（昭和8）年に常磐村との合併以降、12度に及ぶ近隣町村との合併により、総面積217.32k㎡、人口270,775人（2017（平成29）年10月1日現在常住人口）の都市に成長しました（図1-6、表1-1参照）。

図1-6 表1-1 市域の変遷



| 区 | 編集年月日 | 旧市町村名 | 面積 (k㎡) | 人口 (人) |
|---|------------|---------|---------|---------|
| A | 明治22年4月1日 | 市制施行 | 6.17 | 25,591 |
| B | 昭和8年3月15日 | 常磐村 | 13.26 | 64,771 |
| C | 昭和24年11月3日 | 吉田村の一部 | 13.37 | 67,885 |
| D | 昭和27年4月1日 | 緑岡村 | 39.23 | 82,351 |
| E | 昭和27年4月1日 | 上大野村の一部 | 86.93 | 110,436 |
| F | 昭和30年4月1日 | 上大野村 | | |
| G | | 柳河村 | | |
| H | 昭和30年4月1日 | 渡里村 | | |
| I | 昭和30年4月1日 | 吉田村 | | |
| J | | 酒門村の一部 | | |
| K | 昭和30年4月1日 | 河和田村の一部 | 111.54 | 120,775 |
| L | 昭和32年6月1日 | 飯富村 | | |
| M | | 国田村 | | |
| N | 昭和33年4月1日 | 赤塚村 | 146.02 | 132,944 |
| O | 平成4年3月3日 | 常澄村 | 175.90 | 246,600 |
| P | 平成17年2月1日 | 内原町 | 217.45 | 262,603 |

注1 人口は、各年10月1日現在である。

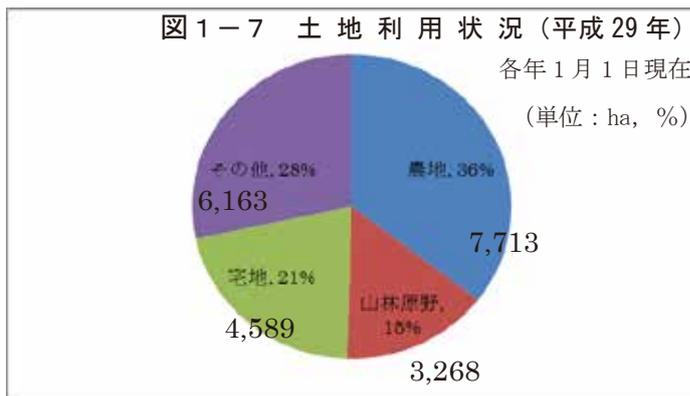
2 2007（平成19）年10月1日から笠間市との境界修正を要因として、面積が217.43k㎡となっている。

3 2014（平成26）年10月1日から面積計測方法の変更を要因として、面積が217.32k㎡となっている。

（資料：平成30年版水戸市の概要）

(2) 土地利用

本市の土地利用の状況は、2017（平成 29）年において、農地と山林原野あわせ 10,981ha と全体の約 51%を占め、比較的緑の多い都市であることがうかがえます。2005（平成 17）年の内原町との合併により、農地・山林原野面積は大きく増加したものの、土地利用の推移を見ると、農地は減少傾向にあり、宅地化や耕作放棄による荒地化が進んでいると考えられます（図 1－7，図 1－8，図 1－9 参照）。

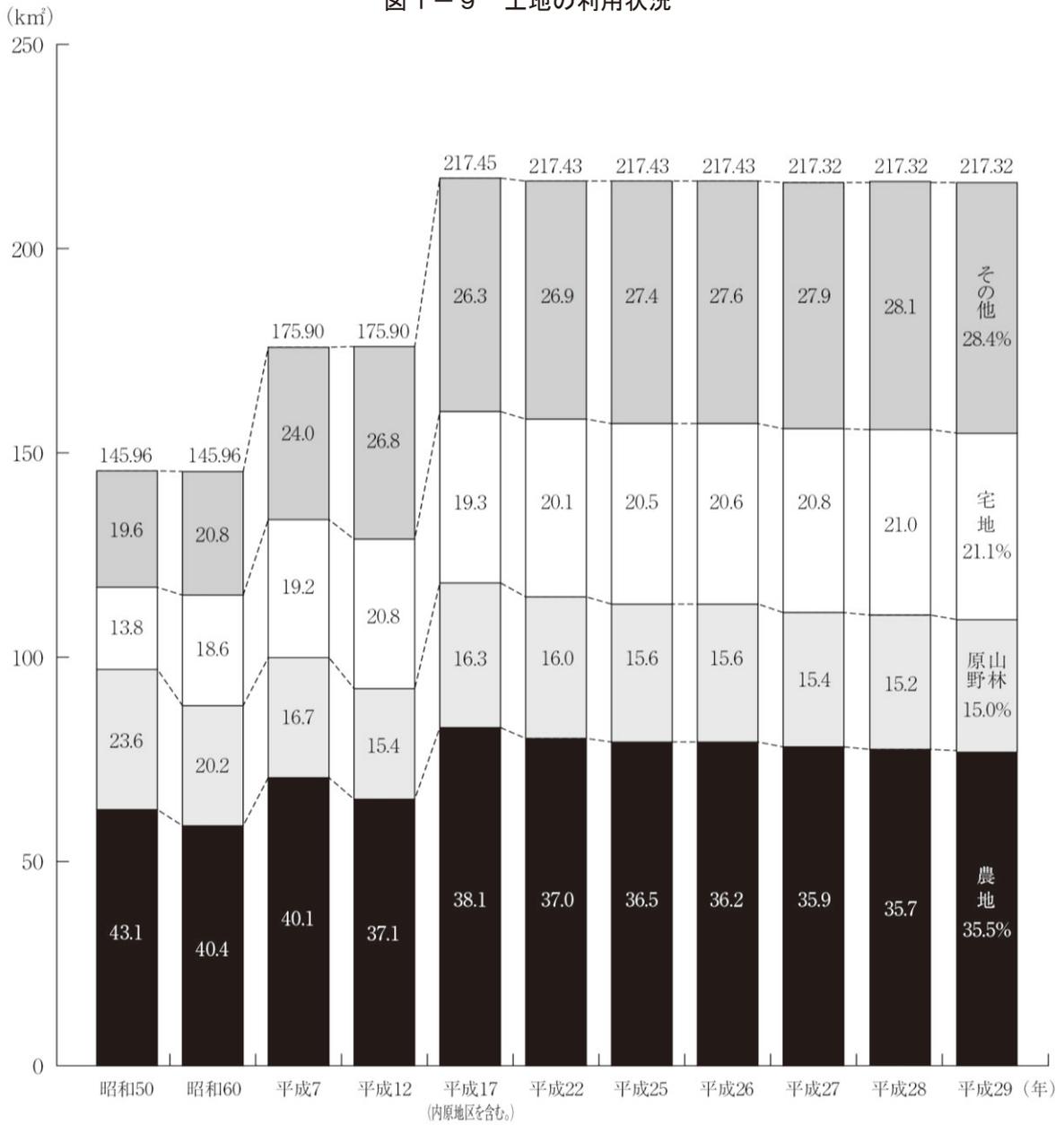


（資料：平成 30 年版
水戸市の概要）

図 1－8 土地利用計画図



図 1-9 土地の利用状況



(資料:平成 30 年版水戸市の概要)

(3) 人口

本市の人口は、2017（平成 29）年 10 月 1 日現在で 270,775 人となっており、人口規模が県内第 1 位であり、県全体（2,896,675 人）の約 9.3%を占めています。

近年の人口はおおむね横ばいであり、1975（昭和 50）年から 1980（昭和 55）年までの 5 年間の人口増加率は 8.5%でしたが、2010（平成 22）年から 2015（平成 27）年までの 5 年間の人口増加率は 0.8%となっています（表 1－2 参照）。

また、年齢別人口の推移を見ると、1985（昭和 60）年から 2015（平成 27）年までの 30 年間で、年少人口が 22,624 人、構成比が 22.6%から 13.2%へと大幅に減少した反面、高齢者人口は 43,224 人、構成比が 9.1%から 25.1%へと増加し続けており、少子・高齢化がさらに進行しています（表 1－2 参照）。

表 1－2 国勢調査人口の推移（平成 27 年）

各年 10 月 1 日現在

| 区 分 | 人 口 | | | | | | | |
|---------|---------|------------------|------|---------------------|------|-------------------|------|-----|
| | 総 数 | 年 齢 別 人 口 | | | | | | 増加率 |
| | | 年少人口 (0～14 歳) | 構成比 | 生産年齢人口 (15～64 歳) | 構成比 | 高齢者人口 (65 歳以上) | 構成比 | |
| 昭和 50 年 | 220,859 | 56,057 | 25.4 | 148,665 | 67.3 | 16,011 | 7.2 | — |
| 昭和 55 年 | 239,742 | 59,276 | 24.7 | 160,662 | 67.0 | 19,559 | 8.2 | 8.5 |
| 昭和 60 年 | 253,744 | 57,463 | 22.6 | 173,067 | 68.2 | 23,012 | 9.1 | 5.8 |
| 平成 2 年 | 260,456 | 50,232 | 19.3 | 180,830 | 69.4 | 27,962 | 10.7 | 2.6 |
| 平成 7 年 | 261,275 | 44,165 | 16.9 | 181,479 | 69.5 | 34,765 | 13.3 | 0.3 |
| 平成 12 年 | 261,562 | 40,269 | 15.4 | 178,627 | 68.3 | 42,192 | 16.1 | 0.1 |
| 平成 17 年 | 262,603 | 38,118 | 14.5 | 174,321 | 66.4 | 49,935 | 19.0 | 0.4 |
| 平成 22 年 | 268,750 | 37,340 | 14.1 | 169,886 | 64.1 | 57,793 | 21.8 | 2.3 |
| 平成 27 年 | 270,783 | 34,839 | 13.2 | 163,039 | 61.7 | 66,236 | 25.1 | 0.8 |

※現市域の人口とし、旧常澄村（平成 4 年合併）と旧内原町（平成 17 年合併）の人口を含む。

（資料：総務省統計局「平成 27 年国勢調査人口等基本集計結果」）

(4) 交通機関

本市を貫通する幹線道路について、高速交通網では、南北に常磐自動車道（埼玉県三郷市～宮城県亘理町）が縦断します。また、東部では北関東自動車道（本市～群馬県高崎市）とそれに接続する東水戸道路（本市～茨城県ひたちなか市）が横断しています。

国道では、関東と東北地方を結ぶ道として、国道6号（東京都中央区～宮城県仙台市）があります。国道6号は江戸時代の浜街道（水戸以南は水戸街道とも）と大部分が一致します。また、国道118号（本市～福島県会津若松市）と、国道349号（本市～宮城県柴田町）が走ります。関東地方の他の主要都市を結ぶ道として、本市を起点として、群馬県前橋市を結ぶ国道50号、国道51号（本市～千葉県千葉市）、国道123号（本市～栃木県宇都宮市）があります。

鉄道では、市街地中央に位置する水戸駅は、JR常磐線（東京都荒川区～宮城県岩沼市）の主要駅の一つであり、JR水郡線（本市～福島県郡山市）及び水戸線（茨城県笠間市～栃木県小山市。一部水戸駅直通）、鹿島臨海鉄道大洗鹿島線（本市～茨城県鹿嶋市）のターミナルとなっています。

このように、本市は東北地方と関東地方を結ぶ結節点であり、関東地方の他の主要都市への移動も容易であるという、非常に利便性の高い都市といえます（図1-10参照）。

図1-10 水戸市内の主要交通網図



(資料：平成30年版水戸市の概要)

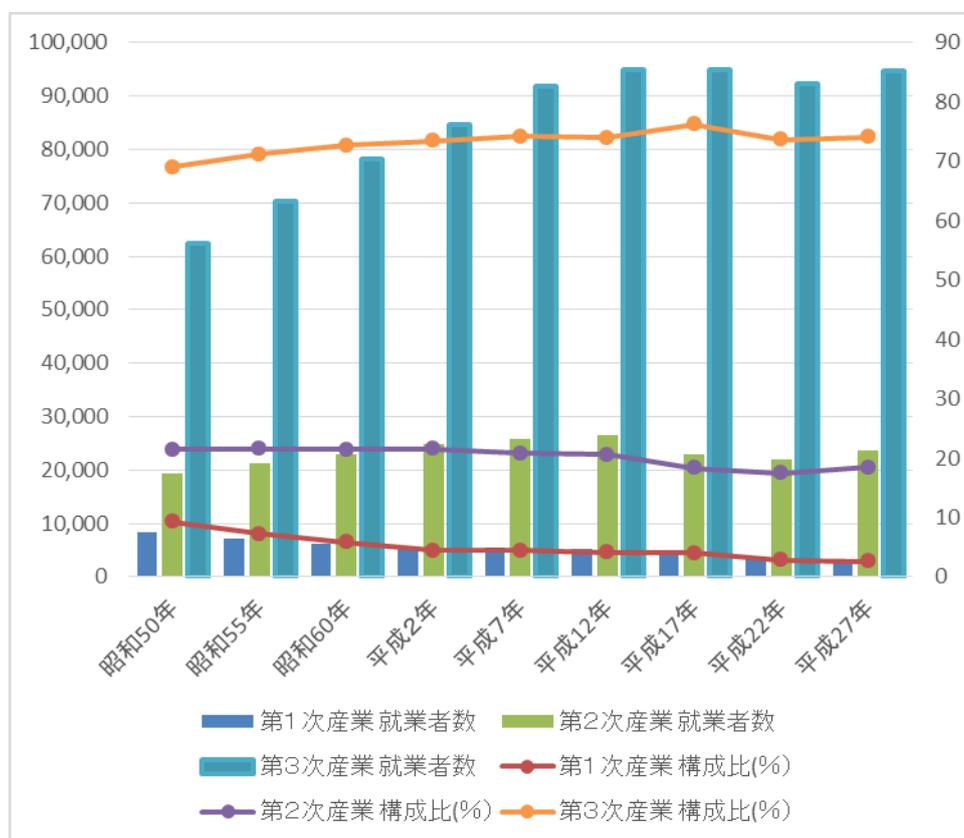
(5) 産業経済

本市の産業は、第3次産業の割合が74.1%とその大半を占めています。2013(平成25)年に、情報通信の高度化、経済活動のサービス化の進展、事業経営の多様化に伴う産業構造の変化に適合するよう日本標準産業分類が改訂されましたが、ここ約25年の間でも、産業別の構成比の大きな変化は見られません。業種別には、卸売業・小売業が26.1%、次いで、宿泊業・飲食サービス業12.7%、建設業9.4%、生活関連サービス業・娯楽業9.3%の順となっています。

さらに、本市における産業構造を就業者人口の推移から見ると、農業を中心とする第1次産業は、年々減少を続け、1975(昭和50)年は9.3%でしたが、2015(平成27)年には2.6%と激減し、約5,100人の就業者が減少しました。第2次産業は、おおむね横ばいとなっていました。1995(平成7)年以降は減少傾向にあります。

一方、商業・サービス業を中心とする第3次産業は、1975(昭和50)年の69.0%から2015(平成27)年には74.1%へと増加し、就業者も約32,000人の増となっており、本市の第3次産業に集中した産業特性が顕著となっています。(図1-11参照)。

図1-11 産業別就業者人口の推移 (単位：人/%)



(資料：総務省統計局「平成27年国勢調査人口等基本集計結果」を基に作成)

(6) 観光

本市は、長い歴史と伝統に培われた豊富な歴史的資源により、年間を通して国内外の多くの観光客が訪れています。また、常磐自動車道のほか、北関東自動車道や東関東自動車道の整備・延伸、さらに茨城空港（小美玉市）の離発着便の増加で、国内外からの交通の便が向上し、観光客数は着実に増加しています。

本市の観光入込客数（延べ人数，ゴルフ場利用者を除く）については、東日本大震災が発生した 2011（平成 23）年こそ減少に転じましたが、本市が官民協働で進めている誘致や宣伝活動もあり、震災以降は着実に増加しています。2017（平成 29）年において、茨城県の観光入込客数（延べ人数，ゴルフ場利用者を除く）55,855,100 人に対して、本市は 3,965,900 人であり、県全体の 7.1%を構成しています。外国人観光客数について、宿泊者数が、2013（平成 25）年と 2017（平成 29）年では、約 2.5 倍の増加をみており、今後も堅実に増加することが見込まれています（表 1－3 参照）。

2015（平成 27）年に、旧弘道館、常磐公園（偕楽園）、水戸彰考館跡、大日本史、日新塾跡が日本遺産「近世日本の教育遺産群—学ぶ心・礼節の本源—」に認定され、それに伴う誘致活動も進められ、観光客入込数がさらに増加した要因になっています。

今後も、様々な事業を展開することにより、観光入込客数の増加を図ります。

表 1－3 水戸市及び茨城県における観光入込客の推移と概況（単位：人）

| | 平成 25 年 | 平成 26 年 | 平成 27 年 | 平成 28 年 | 平成 29 年 |
|-------|------------|------------|------------|------------|------------|
| 水戸市 | 3,426,800 | 3,426,000 | 3,674,100 | 3,736,700 | 3,965,900 |
| 宿泊 | 454,602 | 496,844 | 396,154 | 480,667 | 614,351 |
| 外国人宿泊 | 12,822 | 15,421 | 21,298 | 32,743 | 31,580 |
| 茨城県 | 42,573,500 | 45,382,200 | 51,647,600 | 55,844,600 | 55,855,100 |
| 宿泊 | 13 % | 13.8 % | 13.8 % | 12.9 % | 12.9% |
| 日帰り | 87 % | 86.2 % | 86.2 % | 87.1 % | 87.1% |

※ 1 水戸市の宿泊者数及び外国人宿泊者数は国土交通省観光庁「宿泊旅行統計調査」による。茨城県の数値は「茨城の観光レクリエーション現況（観光客動態調査結果）」による。

※ 2 2010（平成 22）年までは年度集計，2011（平成 23）年からは暦年集計。

3 歴史的環境

(1) 歴史

古代から海や川の水の出入口を「みと」又は「みなと」といい、那珂川と桜川・千波湖との間に突出した台地の地形上の特色により「みと」と呼ばれていました。栃木県那須地方から太平洋へ、関東平野東部を横断して注ぎ込む那珂川を有し、その舟運にかかる河港として栄え、交通の要衝地とされたことに由来しています。

ア 原始時代～古墳時代

本市を含む周辺地域で人々が生活を始めたのは、^{じゅうまんぼら}十萬原遺跡出土石器の存在から、先土器時代と呼ばれた3万年前の時代ではないかと推定されています。また、同じく先土器時代で、1万数千年前と考えられる赤塚西団地遺跡や開江遺跡などでは、狩猟に使用された道具や獲物を加工した道具が発見されています。

次の縄文時代では、^{いいとみちようぼぼじり}飯富町馬場尻遺跡から、今から約9000年前の土器が出土しています。また、奈良時代の『^{ひたちのくにふどき}常陸国風土記』に記される^{おおくし}大串貝塚(国指定の史跡)は、茨城県内では珍しい縄文時代前期(約5,000年以上前)の貝塚で、世界で最も古く記録された先史時代の貝塚でもあります。その遺物から汽水域を漁場とした縄文人の生活がしのべれます。

縄文時代の中期になると、遺跡の数も増大し、^{あくつ}河和田町坏遺跡にみられるように集落が大きくなります。後・晩期になると遺跡の数が少なくなりますが、^{またぐまちょう}全隈町^{かねあらいざわ}金洗沢遺跡にみられるような精巧な土器や信仰のために使われた土偶、土版がつくられていました。

弥生時代の2世紀頃になると、水戸市域にも稲作が広まっていきます。市内では^{おおつかあらじ}大塚新地遺跡に初めて弥生土器がみられ、^{やなかわちょう}柳河町遺跡等の那珂川流域からも発見されています。また、縄目文様の系譜をもった特徴的な文様を持つ^{じゅうおうだいしき}十王台式土器文化圏の中心地の一つとなり、当地が独自の文化を形成していたことがうかがえます。

古墳時代になると、大和朝廷の統治力が水戸地方にも及ぶようになり、支配者の象徴である古墳が造られるようになりました。^{あたごやま}愛宕山古墳(国指定の記念物(史跡))は那



大串貝塚



愛宕山古墳

珂川右岸の台地上に立地し、全長 136mの前方後円墳で、県内 3 番目の規模を誇ります。本古墳から出土する埴輪に野焼きの特徴がみられることから、造営時期は 5 世紀前半にさかのぼると考えられています。周辺地域にこれほどの規模を持つ古墳はなく、当該時期に大和政権との密接な関係を持ち、強大な権力を保持した在地首長が市域に存在していたことを示すものとして注目されます。



吉田古墳横穴式石室の奥壁

7 世紀に那珂川右岸の台地平坦部に造られた吉田古墳（国指定の記念物（史跡））は、横穴式石室の奥壁に線刻装飾が施される八角形墳であると考えられます。多角形墳は当時の中央政権が用いる形であることから、中央政権との強いつながりをみてとることができます。

イ 奈良時代～平安時代

孝徳天皇期の 7 世紀中頃に全国で国・評（郡）・里（郷）の地方制度が整えられると、本市域は常陸国となり、那賀評（のち那賀郡）に属しました。各郡には郡衙（郡役所）が置かれ、那賀郡衙は渡里町の「台渡里官衙遺跡群（台渡里官衙遺跡・台渡里廃寺跡）」（国指定の記念物（史跡））周辺に置かれていたと推定されています。周辺遺跡の発掘調査によると、7 世紀後期以降には、寺院造営を起りとして那賀郡衙の組織化が行われたと考えられています。



台渡里官衙遺跡群

また、那珂川と湊沼川の合流点に面し、大串遺跡から望む低地帯に、那賀郡衙正倉院（税を納める倉）の別院と考えられる駅家（緊急を要する使者に馬と食料を提供した施設）である平津駅（津駅）が設置されていたことが、『常陸国風土記』に記されています。さらに、台渡里官衙遺跡群より東北、那珂川を挟んで、田谷に瓦が出土するところがあり、ここが河内の駅家とする説もあります。

吉田神社の神宮寺（神社に付属した寺院）である薬王院は、桓武朝期（在位 781 年～806 年）の開基と伝えられています。吉田神社とともに水戸街道に面して位置し、台渡里廃寺跡に代わる新しい宗教拠点として発展してきました。

935（承平^{じょうへい}5）年から940（天慶^{てんぎょう}3）年にわたって起きた「平将門^{たいらのまさかど}の乱」は、京都の中央政権を震撼させる出来事であった一方、常陸地方の武士の成長を促すことになりました。将門を討った平国香^{たいらのくにか}の子孫である常陸大掾^{ひたちだいじょう}氏がその勢力を伸ばし、一族の吉田太郎幹清^{もときよ}と石河次郎家幹^{いえもと}が水戸を中心とした吉田・那賀両郡に広がっていきました。

ウ 鎌倉時代～室町時代

（ア）水戸城の成立

「水戸」という地名は、応永年間(1394年～1428年)のものとして推定される吉田薬王院文書に現れたものが早い例とされています。その後しばらくは同じく海水の出入口を意味する「江戸」と併用されることが多く、戦国時代に佐竹氏が水戸城を本拠とした時期あたりから「水戸」もしくは「三戸」が用いられ、やがて「水戸」が定着したと考えられています。

鎌倉時代初期には、大掾^{だいじょう}一族で吉田郡の豪族石河次郎家幹の次男大掾（馬場）小次郎資幹^{すけもと}が、上市台地の先端部に水戸城（馬場館^{ばばやかた}）を造営したといわれています。資幹は鎌倉幕府の御家人として仕え、常陸国を実効支配できる常陸国大掾職を継承して、常陸平氏の惣領（一族の長）となりました。資幹には10人の子供らがあり、水戸付近に根を下ろし、在地支配を確かなものとししました。

もともと、大掾氏は、常陸国大掾職を任ぜられて以後、府中^{ふちゅう}（現在の石岡市）の館を本拠としたことから、当時の水戸城は実質的には支城として機能していたと考えられています。

この他に、水戸は、大掾氏と同じく常陸平氏の吉田氏が拠点としており、吉田神社のある吉田郡を支配下におさめるなど、勢力を広げていきました。この吉田氏の擁する常陸国三宮である吉田神社と、その神宮寺である薬王院が古代より続いて中世の水戸における宗教的な拠点として機能していました。

（イ）江戸氏による支配

15世紀初め頃に、馬場氏は南北朝の争乱や上杉禅秀^{ぜんしゅう}の乱などに関わったことで、次第に勢力を弱めていきました。その間隙に乗じて、江戸通房^{みちふさ}が水戸城占拠を企てます。江戸氏はもと那珂川東岸の下江戸を本拠としていた土豪で、江戸氏を初めて称した通高^{みちたか}は、河内源氏である佐竹義篤^{さたけよしあつ}の娘を妻とし、常陸北部に強い勢力をもった佐竹氏に従属していました。15世紀に入り、通高の子江戸通景^{みちかげ}は本拠地を下江戸から河和田^{かわわだ}（河和田城）に移し、在地支配勢力を着実に広げていきました。さらに、通景の子である通房は水戸城攻略を図りました。1426（応永33）年、水戸城主馬場大掾満幹^{みつもと}が一族家臣を伴って府中に赴いていた際に、通房はわずかな手勢のみ

で水戸城を夜襲し、これを占拠したと伝わります。以後、水戸城は、約 160 年間にわたり江戸氏 7 代の居城となりました。

(ウ) 佐竹氏による水戸城大改修

1590 (天正 18) 年、豊臣秀吉が小田原北条氏を滅ぼすと、水戸を含む常陸の勢力図が大きく変化していきます。佐竹義宣^{よしのぶ}は北条氏攻めにいち早く秀吉に従いましたが、江戸氏や大掾 (馬場) 氏は秀吉に服従しなかったため、秀吉は佐竹氏のみ^{しげみち}に常陸北部の支配を認めました。そのため、義宣は水戸城主江戸重通^{しげみち}を攻めて江戸氏を水戸城から追放するとともに、大掾一族を滅ぼしました。義宣は太田城 (現常陸太田市) から水戸城に移り、常陸北部 54 万石の居城となりました。太田城は佐竹氏の領内では北部に位置しており、関東平野に面し、かつ水上交通の要衝である水戸城の方が政務を行ううえで有益と判断したと考えられます。1592 (文禄元) 年には城内鎮守として八幡宮 (重要文化財) が創設され、1593 (文禄 2) 年以降水戸城及び城下町が大改修され、安土・桃山時代の様式を持つ城郭として整備されていきました。

エ 江戸時代

(ア) 水戸徳川家の成立

1600 (慶長 5) 年の関ヶ原の合戦後、佐竹氏は、1602 (慶長 7) 年に秋田転封となり、徳川家康の 5 男武田信吉が下総佐倉 4 万石から水戸 15 万石の領主となりました。しかし、信吉はその翌年に死亡し、家康の 10 男頼将^{よりまさ} (後の紀州藩初代藩主頼宣^{よりのぶ}) が水戸 20 万石 (後 25 万石) の城主となりました。1609 (慶長 14) 年、家康は頼将を駿府城主とし、下妻 10 万石に封ぜられていた 11 男頼房^{よりふさ}を水戸城主に据えました。

後に水戸藩は 35 万石に加増されて、御三家のひとつとして列せられるようになります。頼房時代、水戸城下は関東では江戸に次ぐ城下町として拡大整備されていき、城郭の立地する台地を上町^{うわまち}、ここから東方に望む低地を下町^{しもまち}と通称されるようになりました。今日の市街地の基礎が形成されたのです。

1610 (慶長 15) 年に関東郡代の伊奈備前守忠次^{いな びぜんのかみただつぐ}によって、千波湖の氾濫^{はんらん}から守る治水対策と、城南の村々への水田用水を送る利水路として備前堀が掘られました。



昭和初期の水戸城三階櫓の様子

現在でも約 1,000 h a 余の水田を潤している、現役の用水路として利用されています。

(イ) 光圀の藩政

頼房の3男で第2代藩主となった光圀は、父同様水戸城下の整備を進めました。城下の交通の便をよくするため、千波湖に堤を設けました（柳堤^{やなぎづつみ}）。水戸城下の上水（飲み水）が不足していたことから、笠原水道を開設して下町に上水を引きました（県指定の記念物（史跡））。また、大規模な宗教統制と寺院整理を断行し、家臣団に対しては儒教形式に基づいた共同墓地である酒門共有墓地と常磐共有墓地（共に市指定記念物（史跡））を創設しました。これら光圀が行った政策は、その後の水戸城下町の都市計画に大きな影響を及ぼすことになりました。

光圀は同時に文教政策に力を入れました。日本の歴史書『大日本史』の編さんに着手し、その編さん所として、1672（寛文12）年に江戸の水戸藩邸に史局（後の彰考館^{しょうこうかん}）を設立しました。1698（元禄11）年には彰考館を水戸城二の丸の一面に分離・移転しました。これが旧水戸彰考館です（現水戸市立第二中学校敷地内）。

『大日本史』は全国の藩校でテキストとして用いられ、水戸の学問は近世日本における学問・教育の発展に大きく寄与しました。編さん事業は光圀死後も江戸時代を通じて継続され、完成をみたのは1906（明治39）年のことです。ただし、膨大な予算を費やしたため、水戸藩の財政を逼迫^{ひっぱく}させることにもなり、光圀の死後、水戸藩領で大規模な一揆（宝永の一揆）がおこる遠因にもなりました。



大日本史

(ウ) 斉昭の藩政

江戸時代後期になると、諸外国の船が日本沿岸に現われ、同時に封建体制にも動揺がみられるようになりました。こうした国内外の経済的危機と政治的危機を乗り切るべく、藩政改革に取り組んだのが第9代藩主徳川斉昭^{なりあき}でした。

斉昭は、会沢正志斎^{あいざわせいしさい}や藤田東湖^{ふじたとうこ}といった学者を登用し、藩政の改革に乗り出します。藤田らの主張は実践的かつ藩を超えて日本一国を対象とした点に大きな特徴があり、彼らの著作や教えが幕末の人々の思想に大きな影響を与えることになりました。斉昭は、人材育成に力を入れ、藩校弘道館^{はんこうこうどうかん}（重要文化財・特別史跡（旧弘道館））

を設立しました。弘道館は藩校として日本最大規模を誇り、儒学、史学、兵学、数学、詩歌、医学、天文学、武芸等の様々な科目を学ぶことができる総合大学のような性格を有しました。弘道館は藩士の子弟の学ぶ場でありましたが、月に一度城下の医師が弘道館内にあった医学館で学ぶ機会を得るなど、武士以外の身分の人々にも学ぶ機会が与えられました。



日本最大の藩校「弘道館」

斉昭はあわせて、弘道館と一対の施設となる偕楽園（国指定の記念物（史跡・名勝）「常磐公園」）を開きました。中国の故事である「^{いちちやういっ}一張一弛」^し、すなわち修業の間の休息もまた教育のひとつとして捉え、偕楽園を修養の場と決めました。さらに、単に大名家や上級武士が用いる場ではなく、領民を含む多くの人々に開放しました。偕楽園が単なる大名庭園ではなく、公園として認識される^{ゆえん}所以です。こうして水戸城内外に修業の場と休息の場という一対の存在が置かれ、水戸の都市景観に華を添えるとともに、偕楽園は現在まで水戸の人々に親しまれる場となっています。

教育の発展は、こうした藩校教育だけに止まらず、水戸城下及び農村における私塾（学問塾）・寺子屋（手習い塾）での教育が大きな役割を果たしました。代表的な私塾として、城下では^{ふじた ゆうこく}藤田幽谷の主催した^{せいらんしゃ あいざわせい し さい}青藍舎、^{なんがいにじゆく}会沢正志斎の主催した南街塾が著名で、農村では^{にっしんじゆく}日新塾（市指定記念物（史跡））が知られています。このうち日新塾は、1820（文政3）年頃から、水戸藩郷士で後に^{またぐま}全隈村庄屋となった^{かくらい さざん}加倉井砂山によって運営されました。時勢に即応する人材の育成と自主性重視の教育方針のもと、身分を問わず門戸を開放し、多彩な門人が通いました。



日新塾跡

（エ） 徳川慶喜と水戸

斉昭の7男^{よしのぶ}慶喜は、一橋家へ養子として出される以前に弘道館で教育を受け、水戸藩の学問・教育が、彼の政治姿勢への根幹をなすことになりました。将軍後見職、^{きんり ごしゆえいそうとく}禁裏御守衛総督を歴任した後、14代将軍^{いえもち}徳川家茂が長州出兵中に急死したため、

15代将軍となりました。しかし政局の混乱はますます進み、慶喜は江戸幕府を維持することが困難と判断し、1867（慶応3）年に大政奉還を奏上しました。こうして徳川將軍家264年の歴史に幕を降ろしました。

幕末の動乱のなかで水戸藩内の勢力は分裂し、激しい内部抗争が繰り返されました。このことで水戸藩は弱体化し、政局から大きく後退していくことになりました。

オ 近・現代

（ア）水戸市の誕生

1871（明治4）年の廃藩置県により、水戸藩は廃止され、水戸県となりました。その後周辺の県の統廃合が進み、茨城県が誕生します。水戸はそのまま県都となり、弘道館が初代茨城県庁として利用されました。その後も、一貫して水戸城跡内に県庁がおかれ、1999（平成11）年に笠原町へ県庁が移転となるまで、水戸城跡周辺は江戸時代に続いて政治の中心地となりました。



初代茨城県庁として活用された弘道館
（『水戸百年』より）

しかし、藩から県への移行は必ずしもスムーズに進んだわけではなく、1872（明治5）年に大蔵大丞渡辺清が県令心得になった直後、水戸城が何者かに放火されました。旧藩士族が新政府により水戸が支配されることに対して反発したとも考えられています。

渡辺は士族授産事業を進めるとともに、水戸の商工業の振興を積極的に進めました。さらに、徳川光圀と斉昭を祀る常磐神社まつの創設を認め、光圀と斉昭二人に神号を与えました。こうした士族の不満を抑える努力もあり、茨城県政は少しずつ安定していくことになりました。

1889（明治22）年に市制・町村制が施行されると、上市・下市のほかに、常磐、細谷ほそや、吉田、浜田四村の各一部を合併し、全国31市のひとつとして「水戸市」が誕生しました（関東地方では、東京市・横浜市・水戸市の3市のみ）。また、現在の市域の他地域では、常磐村が独立の村となったほか、旧来の数カ村が合併して新しい村々が誕生しました。

（イ）近代都市の発展

明治以降、全国で多くの都市的施設が逐次整備されていきますが、水戸も例外ではなく、城下町としての景観を基盤に近代都市として新しい発展を遂げていきました。特に、1889（明治22）年の水戸鉄道の開通によって比較的早期に全国的鉄道

網に接続しました。これにより、商業や金融業の発展が促進されました。また、水戸の観梅は鉄道網の発展とともに、東京を中心とした大都市圏の人々が集まる一大イベントへと成長していきました。

1904（明治 37）年の日露戦争の勝利後、日本の軍備拡張により水戸にも歩兵第二連隊を中核とする陸軍の衛戍（えいじゆ駐屯地）が設置されました。以後、水戸は軍都としての性格も帯びるようになります。

1920（大正 9）年には水戸高等学校が設立され、各界に多くの有為の人材を輩出するなど、教育・文化の中心地としての機能も果たし、学都としての性格を強くもつようになりました。

しかし、1945（昭和 20）年の第二次世界大戦に伴う大空襲により、市街地の大半は焼失し、水戸城三階櫓や偕楽園の好文亭等、多くの歴史的建造物やまちなみを失うこととなりました。

（ウ）戦後復興と発展

戦後、観梅等の観光行事が速やかに復活し、官民が力をあわせて、復興が進められていくこととなります。空襲により焼失した市街地は、茨城県が施行主体の戦災復興都市計画事業として、水戸城跡及びその城下町の地形や町割を利用して、新しい姿に移り変わって再び発展を遂げました。

こうしたなかで、歴史的な景観を生かして新しいまちづくりが行われますが、そのなかでも代表的なものに、偕楽園公園とその周辺の緑地帯が挙げられます。かつて「一張一弛」を体現する庭園であった偕楽園と千波湖を含めたその周辺を都市公園として整備したものであり、園内から望む千波湖とその低地帯は優れた借景美として、偕楽園を名園たらしめています。

この間に、水戸市は、周辺町村との合併を繰り返しながら、1976（昭和 51）年に 20 万人都市の仲間入りを果たしました。そして、「平成の大合併」の最中の 2005（平成 17）年には、内原町との合併を行い、現在の市域になりました。

（エ）東日本大震災

2011（平成 23）年 3 月 11 日午後 2 時 46 分、東北三陸沖を震源とする東日本大震災が発生しました。未曾有の被害が生じたこの震災では、本市においても、震度 6 弱の強い揺れに襲われ、尊い人命が失われたほか、ライフラインが寸断され、建物や道路などに大きな被害を受けました。弘道館や偕楽園といった文化財も甚大な被害を受け、水戸の梅まつりも中止となりました。しかし、震災後速やかに復興事業が進められたことで、水戸はもとの活気を取り戻し、弘道館や偕楽園も旧状に復しました。

(オ) これからの水戸市

2014（平成26）年に将来都市像を「笑顔あふれる安心快適空間 未来に躍動する 魁のまち・水戸」とした「水戸市第6次総合計画-みと魁プラン-」を策定しました。そこでは「笑顔にあふれ快適に暮らせる安心都市づくり」、「未来に躍動する活力ある先進都市づくり」、「水戸ならではの歴史、自然を生かした魅力ある交流都市づくり」の基本理念を掲げています。

水戸市はこれからも茨城県の県都としての役割を担いながら、市勢の発展に努めていきます。



千波湖南岸より、偕楽園方面を望む

(2) 関わりのある人物

ア 馬場資幹 (生没年未詳)

常陸平氏。馬場小次郎と名乗りました。常陸平氏は、平将門の乱平定に功績のあった平貞盛の養子である維幹(貞盛弟の実子)を祖とします。以後、維幹の嫡流は常陸大掾氏と名乗りました。一族のうち、維幹の孫の清幹が吉田・鹿島・行方等を所領して、吉田氏と名乗りました。資幹は吉田氏一族石河家幹の次男で、戸田野(現ひたちなか市部田野)を領有していたと考えられています。

『吾妻鏡』には、1190(建久元)年11月に源頼朝が上洛した際に、資幹の名が確認できます。その後、常陸大掾氏の多気義幹が頼朝によって殺害されると、頼朝は資幹に義幹の所領のうち府郡(国府の所在地)を与えました。1214(建保2)年、資幹は常陸大掾職に就任し、常陸平氏の惣領となりました。さらに奥州総奉行などを歴任します。資幹死後も子孫は長く常陸大掾職に就任しました。

大掾(馬場)氏は那珂川と千波湖に挟まれた、東西に延びる台地の東端に館(馬場館)を築きました。現在の茨城県立水戸第一高等学校の敷地にあったと考えられ、水戸城の起こりとなりました。

イ 佐竹義宣 (1570~1633年)

佐竹氏は河内源氏の流れを汲む、源義家の弟義光(新羅三郎)の直系です。室町時代に室町幕府より常陸守護職を与えられ、常陸北部を支配し、太田城(現常陸太田市)を本拠としました。

1586(天正14)年、義宣は父義重から家督を相続しました。1590(天正18)年、豊臣秀吉が小田原北条攻めのため挙兵すると秀吉に従い、常陸・下野両国の支配を認められました。一方、江戸氏や大掾氏らは従わず、領有を認められなかったため、義宣は江戸氏を水戸城から追放し、大掾氏ほか常陸平氏を滅ぼして、常陸統一を果たしました。太閤検地の結果、54万5800石を領することとなり、これはのちの水戸徳川家(35万石)より広大な領地でした。

義宣は本拠を太田から水戸へ移し、本格的な水戸城や城下の整備を始めました。江戸氏時代の内城を本丸とし、宿町の一角に義宣の居館を築いて二の丸としました。さらに本丸の東側に浄光寺郭(下の丸)を築き、二の丸の西側に三の丸を整備しました。佐竹時代に水戸城の原型ができあがりました。

秀吉死後、豊臣政権が動揺し、1600(慶長5)年に徳川家康と石田三成が戦った



佐竹義宣画像
(秋田市佐竹史料館寄託)

関ヶ原合戦では、義宣は積極的な態度を示しませんでした。そのため、1602（慶長7）年に、家康より出羽秋田への移封を命じられました。

ウ ^{いなただつぐ}伊奈忠次（1550～1610年）

通称は熊蔵。伊奈家はもともと信濃国伊奈郡の土豪で、伊奈忠基（忠次祖父）の時代に、松平広忠（徳川家康の父）に仕えたとされています。忠次は、三河国はずぐん幡豆郡小嶋（現愛知県西尾市）にて、伊奈忠家の嫡男として誕生しました。

忠次は、合戦よりも実務型の役人として才能を発揮しました。1590（天正18）年に家康が関東に移封されると、100万石にわたる地方支配じかたを担当して、検地や河川改修、新田開発、交通政策等で活躍しました。彼の農政は「伊奈流」と呼ばれ、後々まで幕府の基本政策として採用されていきます。

忠次は幕府領以外にも譜代大名領や水戸藩領でも活躍し、水戸藩の検地や、千波湖を水源とする用水堀の開削を行いました。特に、用水堀は忠次の官職名から「備前堀」と呼ばれ、現在まで活用されています。忠次が開発した「備前堀」は、水戸以外にも埼玉県北部（本庄市や深谷市等）に現存しており、彼が農政面で果たした功績の大きさをうかがうことができます。



伊奈忠次像

エ ^{とくがわよりふさ}徳川頼房（1603～1661年）

幼名鶴千代。徳川幕府初代将軍徳川家康の11男。下妻10万石を領し、1609（慶長14）年に兄の徳川頼宣が駿府等へ所領替となると、25万石の領主として水戸へ移りました。後に尾張徳川家、紀州徳川家、そして頼房の水戸徳川家を御三家と呼ぶようになり、将軍家に近い家柄として、幕府内で高い格式を有しました。

頼房は大坂の陣や将軍の上洛の際には留守を命じられ、比較的江戸にいたることが多く、初めて水戸に訪れたのは1619（元和5）年のことでした。

^{ごうたん}豪胆な性格で、家康は2代将軍秀忠に対し、頼房を「腰刀と思ひ秘蔵すべし」と評したと伝えられます。また、弓の技術の高さから、3代将軍家光から弓の名手で、平家たいらのの とのかみのりつねの武将である平能登守教経になぞらえ、「今



徳川頼房画像
（東照宮所蔵）

能登守」と呼ばれたとされています。

一方で、藩職制を整備し、水戸城の大改修や城下町の拡張、藩領の検地や水利事業の実施等、水戸藩の礎を築きました。死後、「威公」と諡おくりなされました。

オ 徳川光圀 (1628~1700年)

幼名長丸。後に千代松。水戸藩初代藩主徳川頼房の三男。母親は側室の谷久子。水戸藩士三木之次夫妻の計らいで三木家の屋敷で誕生しました。頼房の子として認知されたのは5歳の時です。

6歳の時に長兄の頼重よりしげではなく、順房の嫡男となりました（次兄は早世）。若いころの光圀は自由奔放な行動をとることが多かったと言われますが、1645（正保2）年、18歳の時に前漢の歴史家司馬遷が著した『史記』の「伯夷伝」を読み、伯夷叔齊兄弟の家督の譲り合いの話を知り、自分と重ね合わせて、感銘を受けました。以後、光圀は自らの態度を改め、『史記』にならって歴史書を編纂する志を立てます。

1657（明暦3）年、水戸藩の江戸駒込邸に史局（後の彰考館）を開き、歴史書の編纂へんさんを始めました。1661（寛文元）年に父頼房が亡くなると、光圀は水戸28万石を相続して、2代藩主に就任しました。この時、兄頼重や他の兄弟とも相談し、実子頼常よりつねを兄の養子とし、兄の子綱方つなかつと綱條つなえだ兄弟を自らの養子としました。

光圀の施策は多岐にわたりますが、都市整備にかかわる事業では、笠原水道を建設して上水道の整備を進めたことや、宗教政策として寺院の整理を進める一方で、藩士に対して儒教形式に基づいた共有墓地（常磐共有墓地・酒門共有墓地）を整備したことがあげられます。また、歴史書の編纂事業では、彰考館を江戸のほかにも水戸にも創設して、事業を進めました。家臣を全国に派遣し、各地の資料調査を行わせています。

1690（元禄3）年に隠居し、西山御殿（現常陸太田市）に移り、引き続き歴史書の編纂事業を進めました。死後、「義公」と諡おくりなされました。

水戸藩の歴史書は、光圀死後に3代藩主綱條によって「大日本史」と名付けられ、250年にもわたる大事業となりました。また、江戸の水戸藩邸にて父頼房が造成した庭園を整備して、明の学者朱舜水しゆしゆんすいが選んだ名である「後樂園」と命名しました。後樂園は代表的な大名庭園として今日まで知られています（「特別史跡、特別名勝」）。



徳川光圀画像

（茨城県立歴史館所蔵）

さらに、千波湖周辺である水戸徳川家別邸の緑岡御殿に「高枕亭」、笠原水源に「漱石所」を建てるなど、千波湖周辺の景観をこよなく愛しました。

カ 藤田幽谷 (1774~1826年)

幼名午之助、与助。後に治郎左衛門と名乗ります。実名は一正。実家は藤田屋与衛門という古着商でした。少年の頃から彰考館総裁である立原翠軒の塾に学び、秀才との呼び声が高く、やがて翠軒の推薦により彰考館で働くことになりました。

権力者に厳しい意見を述べることを厭わず、18歳のときには、幕府老中松平定信の求めに応じて『正名論』を著しますが、幕府を批判した内容を含むことから、ついに定信には届けられなかったと言われています。また、水戸藩第6代藩主徳川治保に藩政改革を行う建白書を出しましたが、不敬であるとして免職となりました。

1799(寛政11)年の義公(光圀)百年忌にあたり罪を許され、彰考館に復帰します。農政改革を主張する『勸農或問』を執筆し、後に第9代藩主徳川斉昭の藩政改革でとりあげられることとなりました。

大日本史編纂の手法について、師匠である立原翠軒と対立するようになり、第7代藩主徳川治紀も幽谷を支持したことから、1803(享和3)年、翠軒や翠軒を支持する館員が一斉に辞職しました(史館動揺)。これが後の水戸藩内の党争のきっかけとなります。

1804(享和4)年に史館総裁、1808(文化5)年には郡奉行史館総裁兼務となり、大日本史編纂と藩政ともに尽力しました。日本近海に外国人船が出没するようになると、海防を厳重に行うことを主張しました。

家塾青藍舎を開設して、会沢正志斎や豊田天功、そして実子東湖らを育てました。幽谷に学んだ東湖たちが幕末の水戸や日本で活躍することとなります。

キ 立原杏所 (1785~1840年)

甚太郎、任太郎などと名乗ります。

名は任。父は彰考館総裁であった立原翠軒です。1803(享和3)年に父の隠居に伴い、19歳で家督を相続しました。水戸の林十江や小泉壇山、さらに伊勢寂照寺(現三重県伊勢市)の画僧月僊に絵画の技法を学んだといわれます。

江戸に移ってからは、谷文晁に師事



立原杏所画「那珂湊口晩望図」
(茨城県立歴史館所蔵)

し、^{わたなべかざん}渡辺華山ら南画家のほか、書家、詩人、蘭学者など幅広い人々との交流を行いました。

杏所の作品は、^{きんげん}謹厳、^{せいひつ}静謐な作風が多く、高い品格を備えていました。「葡萄図」(重要文化財)や「^{ろがん}蘆雁図」(茨城県指定有形文化財)、「那珂湊口晩望図」(水戸市指定有形文化財)、「青緑山水図」,「高山流水図」他、多くの代表作を残しています。

藩政にはあまり携わりませんでした。水戸藩第8代藩主^{なりのぶ}徳川斉脩が病死し、次の藩主をめぐる藩内が二分した際には、藤田幽谷の息子である東湖とともに、斉脩の実弟である^{ようりつ}斉昭擁立に尽力しました。父同士は^{たもと}袂を分けたが、息子たちは友好的な関係を保ったといわれています。

ク ^{ふじたとうこ}藤田東湖 (1806~1854年)

虎之介、誠之進と名乗ります。名は^{たけき}彪。父親の幽谷に学び、会沢正志齋と並んで幕末の水戸藩を代表する学者として知られています。

1806(文化3)年、藤田幽谷の次男として水戸城下に生まれました。第8代藩主徳川斉脩の後継者をめぐる門閥派と改革派の対立が表面化すると、斉昭擁立に奔走しました。斉昭の藩主就任後に郡奉行となり、斉昭の藩政改革に深く関わります。藩校弘道館の建学趣旨を宣言した「弘道館記」を起草し、『^{こうどうかんき}弘道館記述義』をまとめました。

1844(弘化元)年に斉昭が幕府より隠居・謹慎の命を受けると、東湖も連座して蟄居となりました。しかし、このとき『^{かいてんし}回天誌史』、『^{ひたちおび}常陸帯』、『^{せいきのうた}正気歌』など代表的な著作をまとめ、幕末の志士の思想に深い影響を与えることとなります。

1852(嘉永5)年に自由の身となり、従来のごとく斉昭の側近として海防問題に携わる一方、佐久間象山や西郷隆盛らと交わりました。

その後も側用人や学校奉行を兼務し、斉昭の側近として欠かせない存在であり続けましたが、1854(安政元)年の江戸を襲った大地震で、自らの母親を助けた際に圧死しました。



藤田東湖画像
(大洗町幕末と明治の博物館所蔵)

ケ 加倉井砂山 (1805~1855年)

淡路と名乗ります。名は信、のちに雍やすし。砂山と号しました。加倉井家は代々庄屋を勤め、砂山の祖父の代から郷士格となりました。

砂山は父久泰ひさやすの次男でしたが、若くして兄が亡くなったことから、砂山が養子となって家督を継ぎました。1839(天保10)年に全隈村またぐまの庄屋となり、1841(天保12)年から藩の山林等を管理する山横目やまよこめを兼務し、また1843(天保14)年には水戸藩の下級家臣である歩行士列かちしれつの格となりました。

第9代藩主徳川斉昭との交流もあり、1842(天保13)年の偕楽園内の好文亭の宴では、水戸藩の家臣たちとともに詩歌を詠み、披露されました。この時、斉昭から砂山の詩が特に優れていると称賛されました。

砂山は家塾である日新塾の運営にあたり、多くの門人を育てました。塾では塾生の個性・主義が重んじられ、文武両道の教育方針がとられました。藤田小四郎や斉藤監物、さらに川崎八右衛門など多彩な人材を輩出し、のべ1,000人をこえる門人がいたと言われています。



加倉井砂山画像
(妙徳寺所蔵)

コ 徳川斉昭 (1800~1860年)

幼名は虎三郎、敬三郎。名は紀教としのりのちに斉昭けいざん。景山けいざんまたは潜竜閣せんりゅうかくと号しました。兄で第8代藩主の徳川斉脩なりぶが後継ぎなく病死すると、藩内は將軍家から養子をとるべきとする門閥派と、弟の敬三郎を藩主とする改革派で激しく対立しました。斉脩の遺書が発見され、斉脩の遺志は斉昭を跡継ぎとすることが判明したため、斉昭が藩主となりましたが、このときの藩内の分断が幕末まで続きました。

斉昭は積極的に藩政改革を行い、弘道館や偕楽園を創設しました。一度は將軍徳川家慶より褒美をもらうほどでしたが、後に改革の行き過ぎを咎められ、1844(弘化元)年に隠居・謹慎を命じられました。

謹慎が解かれた後、幕府老中阿部正弘あべまさひろの要望もあり、幕府の海防参与に就任しました。斉昭は攘夷派の旗頭



徳川斉昭画像
(大洗町幕末と明治の博物館所蔵)

とみなされ、さらに將軍継嗣の問題で齊昭の実子慶喜が有力候補となると、一橋派の重鎮とみなされるようになります。これに対し、紀州藩主徳川慶福を推す南紀派の重鎮である井伊直弼らと激しく対立することになり、結局大老となった直弼が条約調印を決断し、慶福を後継者と決めました。一橋派は不時登城して直弼に抗議しましたが、逆に罰せられ、齊昭も蟄居の身となりました。

その後朝廷が水戸藩に幕政改革を命じる「戊午の密勅」を下すと、危機感を感じた直弼が一橋派を厳しく罰し、齊昭にも水戸城での永蟄居を命じました。直弼は脱藩した水戸浪士などにより暗殺されましたが、齊昭も間もなく急死しました。死後、「烈公」と諡されました。

サ 徳川慶喜 (1837~1913年)

幼名七郎麻呂。名は昭致のち慶喜。徳川齊昭の7男として江戸小石川の水戸藩上屋敷で生まれました。翌年に水戸に移り、藩校弘道館で学びました。1847（弘化4）年、11歳で一橋家を相続し、同年に元服して慶喜と改名しました。將軍後継者の有力な候補とみなされていましたが、対立した南紀派で幕府大老の井伊直弼らにより隠居謹慎を命じられました。1862（文久2）年に一橋家を再相続し、將軍後見職を任せられ、幕政に参画しました。

1866（慶應2）年、慶喜は徳川宗家を継ぎ、征夷大將軍となりました。しかし、幕府の力の衰えは明らかで、いつ慶喜が政権を朝廷に返上するかが争点の一つとなっていました。慶喜は幕政改革に努めましたが、倒幕の動きが加速するのを見て、1867（慶應3）年に倒幕派の機先を制して大政奉還を行いました。

慶喜には新政府でも要職に就く話がもちあがっていましたが、薩摩藩や長州藩に強い不満を持つ幕臣らを抑えることができず、1868（慶應4＝明治元）年に鳥羽伏見の戦いがおこりました。幕府軍は敗れ、慶喜は朝敵となりました。慶喜は側近数名とともに大坂城を脱出して江戸城に戻り、恭順の意志を示しました。江戸城ついで水戸の弘道館で謹慎を続け、徳川宗家が静岡に領地を認められると、静岡で隠棲しました。以降政治の社会から一切距離を置きましたが、明治30年代に入り、東京に移住すると共に、貴族院議員となりました。

1913（大正2）年11月、東京の小日向の邸宅で死去。徳川將軍としては唯一、谷中墓地に葬られました。



徳川慶喜
(茨城県立歴史館所蔵)

シ 豊田英雄 (1845~1941 年)

幼名は冬。水戸藩の学者桑原治兵衛くわはら じ へ への次女として水戸で生まれました。母は藤田幽谷の娘で、東湖の妹にあたります。彰考館総裁であった豊田天功とよだ てんこうの長男である小太郎と結婚しますが、小太郎は1866（慶應2）年に京都堀川で暗殺されました。冬は「男子のごとく夫の分まで生きん」と決意し、名を英雄と改めました。1870（明治3）年に近所の子女を集めて家塾を開きました。1873（明治6）年に五軒町の元の豊田家の屋敷はつおうに発桜女学校ができると、英雄はそこで教師となりました。さらに1875（明治8）年に東京女子師範学校（現お茶の水女子大学）が設立されると、教員となりました。翌年に附属幼稚園が開設されると、「日本の保母第一号」となります。幼稚園創設のために鹿児島に赴任した後、水戸徳川家12代当主の徳川篤敬あつよしがイタリア全権公使としてローマに赴任する際に随行員に選ばれ、「欧州女子教育事情調べ」を委託されました。

帰国後、私立女学校「翠芳学舎すいほう」を開校しました。その後も栃木県立宇都宮高等女学校に赴任し、さらに1925（大正14）年には私立水戸大成女学校の校長に就任するなど、終生女子教育の発展に貢献しました。



豊田英雄
（水戸市立博物館所蔵）

ス 横山大観 (1868~1958 年)

幼名は秀蔵、秀松、のちに秀麿ひでまろ。1868（明治元年）年、水戸藩士酒井捨彦と須恵の長男として下市しもいちに生まれました。一家は当初県内を転々しますが、父が茨城県庁勤務となると、水戸に戻りました。1878（明治11）年に親戚を頼って東京に移り、東京美術学校に進学して、日本画を学びました。1888（明治21）年、縁戚の横山家を継ぎました。

卒業後の1896（明治29）年に母校の助教授として迎えられますが、東京美術学校騒動に際して、校長の岡倉天心おかぐら てんしんや橋本雅邦はしもと が ほう、下村観山しもむら かんざんらとともに辞職し、日本美術院の創設に加わります。この頃の大観は、輪郭線を用いず、色の濃淡で表現する無線描法を実践していましたが、「朦朧体もうろうたい」と蔑称で呼ばれました。



横山大観
（『水戸百年』より）

1906（明治 39）年に経営難から日本美術院の絵画部が茨城県北端の五浦（現北茨城市）に移され、天心らとともに家族を伴って移住して研鑽に励みました。1909（明治 42）年に第3回文展に出品した「流燈」（茨城県指定有形文化財）は大観の代表作となります。

天心死後、日本美術院を谷中に再興し、再興美術院の中心として活動しました。水戸市で開催された日本画の公募展では審査にあたるなど、郷土水戸の文化活動に携わりました。1937（昭和 12）年には第1回文化勲章を受章。「瀟湘八景」（重要文化財）や「生々流転」（重要文化財）など、多数の代表作があります。

セ 常陸山（1874～1922年）

幼名は谷。市毛高成の長男として生まれました。市毛家は代々武道をもって水戸藩に仕えていました。1890（明治 23）年に叔父をたより上京しました。水戸出身の4代目出羽海運右衛門の部屋に入門して、1891（明治 24）年初土俵を踏み、四股名は徳川光圀が隠棲した「西山御殿」より取って、御西山谷右衛門と名乗りました。1894（明治 27）年に常陸山と改めました。その後、東京相撲を離れ、名古屋相撲や大阪相撲に移りましたが、1897（明治 30）年に東京相撲に戻りました。順調に昇進を重ね、1903（明治 36）年に横綱に推挙されました。



常陸山
（『水戸百年』より）

海外での巡業相撲も精力的にこなし、1907（明治 40）年にはアメリカでルーズベルト大統領に謁見し、徳川斉昭の和歌が刻まれていた飾太刀を献上しました。

1914（大正 3）年に引退して年寄出羽海を名乗り、相撲協会の筆頭取締役となり、後進を指導しました。

4 文化財等の分布状況

本市には、2019（平成31）年2月時点で、190件（国指定19件、県指定69件、市指定102件）の文化財が指定されています。また、4件の国の登録有形文化財が登録されています。

表1-4 水戸市指定文化財件数

2019（平成31）年2月現在

| 区分 | 有形文化財 | | | | | | | | | | 無形文化財 | 民俗文化財 | | 記念物 | | 合計 | |
|-----|-------|----|----|-----|----|----|-----|------|------|-----|-------|----------|----------|-----|-----|----|------------|
| | 建造物 | 絵画 | 彫刻 | 工芸品 | 書跡 | 典籍 | 古文書 | 考古資料 | 歴史資料 | 小計 | | 有形の民俗文化財 | 無形の民俗文化財 | 遺跡 | 名勝地 | | 動物・植物・地質鉱物 |
| 国指定 | 5 | | 1 | 2 | | | | 1 | | 9 | 2 | | | 6 | 1 | 1 | 19 |
| 県指定 | 6 | 14 | 9 | 24 | 4 | | | 4 | 2 | 63 | | | 3 | 3 | | | 69 |
| 市指定 | 13 | 8 | 13 | 19 | | 2 | 1 | 9 | 9 | 74 | 4 | | 4 | 12 | | 8 | 102 |
| 計 | 24 | 22 | 23 | 45 | 4 | 2 | 1 | 14 | 11 | 146 | 6 | | 7 | 21 | 1 | 9 | 190 |

(1) 国指定等の文化財

ア 国指定の文化財

(ア) 有形文化財

a 八幡宮本殿（建造物）（→P101）

八幡宮は水戸城主佐竹義宣が勧請した神社で、当初八幡小路（北見町）に鎮座しました。1694（元禄7）年、水戸藩第2代藩主徳川光圀によって那珂西村（現城里町）に移され、1708（宝永5）年現在の地に再遷座になりました。本殿は和様・唐様の折衷様式です。



八幡宮本殿

b 薬王院本堂（建造物）（→P93）

薬王院は、かつては常陸三宮の吉田神社の神宮寺で、天台宗の名刹として知られます。桓武天皇の勅願により、807（大同2）年に伝教大師最澄が創建したものと伝えられています。本堂は1527（大永7）年に焼失したもののすぐに再建され、1686（貞享3）年徳川光圀が大修理を行いました。



薬王院本堂

c 中崎家住宅（建造物）

家伝では 1688（元禄元）年建立とされます。居室部分である主屋と、土間部分の2つの建物が接して建てられます。市内には他にも幾つか古民家は残っていますが、元禄年間の形式を保っているものは例がありません。また、現在の敷地は城館跡にあたり、「堀の内」の屋号で呼ばれているように、北西に堀が残っています。



中崎家住宅

d 佛性寺本堂（建造物）

佛性寺は、天台宗の寺院で、本堂は県内には類例のない八角堂です。堂内の墨書から 1585（天正 13）年に建築されたことがわかりました。禅宗様といわれる中国の様式がみられるほか、室町時代の水戸地方独特の特色がみられます。



佛性寺本堂

e 太刀（銘則包作 附 糸巻太刀拵）（工芸品）

鎌倉時代中期の備前福岡一文字派の名工、則包の数少ない作刀の一つです。刃長は 76.7 cm で、反りは 3.0 cm です。刃文は丁字乱れ、鍛えは板目で、「則包作」の銘があります。鞘は黒漆塗菊桐文高蒔絵で、柄は茶糸菱巻、総金具は赤銅魚々子地に金小縁をつけ、菊桐文が散らされています。江戸幕府初代将軍徳川家康所用と伝わり、水戸藩初代藩主徳川頼房が水戸の東照宮に奉納したもので、水戸藩と関わりの深い作品です。東照宮所有。茨城県立歴史館寄託。



太刀
（銘則包作 附糸巻太刀拵）

(イ) 記念物

a 旧弘道館（遺跡）（→P76）

弘道館は水戸藩第9代藩主徳川齊昭とくがわなりあきが創設した水戸藩藩校で、日本最大規模を誇る江戸時代を代表する藩校です。1841（天保12）年に仮開館、1857（安政4）年に本開館しました。

1868（明治元）年の藩内の争乱と、1945（昭和20）年の空襲で一部の建物が焼失したものの、正門と土塀・正庁・至善堂（いずれも重要文化財）、弘道館記碑・孔子廟戟門・学生警鐘かなめいしかひ・要石歌碑しゅばいきひ・種梅記碑・土塁・堀が現存します。また、孔子廟や弘道館記碑を納める八卦堂はっけどうが復元されました。



旧弘道館

b 偕楽園（常磐公園）（遺跡・名勝地）（→P58）

偕楽園は、徳川齊昭が1842（天保13）年に開園しました。齊昭は「一張一弛」の理念のもと、弘道館は修業の場、偕楽園は修養の場という対の施設と考えました。齊昭自撰自署の石碑である偕楽園記碑（天保10年建碑）には、偕楽園の名の由来として「衆と偕に楽しむ」と記され、武士だけでなく広く領民にも開放し、園内に多くの梅が植えられました。

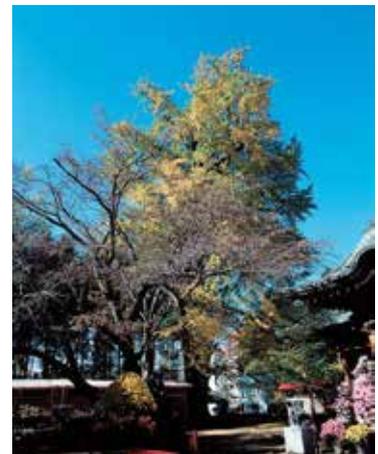
1873（明治6）年、常磐公園の名で開放され、岡山の後楽園や金沢の兼六園と並び、日本三名園の一つに数えられています。



偕楽園

c 白旗山八幡宮のオハツキイチョウ（植物）

八幡宮の御神木として扱われている、胸高直径5.8m、根回り約9.5m、樹高約35mのイチョウです。イチョウには雄株と雌株があり、雌株の老樹には正常の種子（ぎんなん）のほかに葉の上でできるものがあり、これをオハツキイチョウと呼びます。八幡宮のものはオハツキイチョウとしては最大の巨樹で樹勢も旺盛です。樹齢は400年とも600年ともいわれ、八幡宮の建立が1707（宝永4）年で、当時すでに大木として存在していたものと考えられます。



白旗山八幡宮のオハツキイチョウ

イ 国の登録有形文化財

(ア) 水戸市水道低区配水塔（建造物）

1932（昭和7）年に下市地区へ水道水を市民に供給するため造られました。設計者は水戸市水道技師である後藤鶴松で、高さ21.6m、直径11.2mの円筒形のコンクリート製です。

塔の中央にバルコニー風の回廊がせり出し、窓にレリーフが彫られています。また、1階入口の上部にはゴシック風装飾が施されています。1999（平成11）年度に配水塔としての役割を終えましたが、地元のシンボルとして今も地元の人々に親しまれています。

1985（昭和60）年に近代水道百選に、2014（平成26）年には土木学会推奨土木遺産に選ばれました。



水戸市水道低区配水塔

(イ) 和田家住宅延年楼（建造物）

本市に現存する最古の茶亭で、馬口労町（現末広町）の豪商で、石州流の茶を学んだ大高家第6代織衛門守善が1835（天保6）年に自邸内に設けたものです。水戸徳川家の分家で、宍戸藩第7代藩主松平頼筠が「延年楼」と名付けました。2席の茶室と待合などの控座敷があり、2度の移築が行われましたが、庭石なども旧材を使用しています。



和田家住宅延年楼

(ウ) 茨城県立水戸商業高等学校旧本館玄関（建造物）

1904（明治37）年4月の竣工で、設計は旧制土浦中学校本館（重要文化財）なども手掛けた駒杵勤治です。木造1階建てで、屋根はドームを載せた丸みを帯びた形をしています。玄関や窓に半円アーチ形のものが用いられています。西洋風の建築に日本建築の工法が用いられ、柱は石造風、内部の壁や天井は漆喰造りでともに美しい装飾が施されています。校舎は1970（昭和45）年に取り壊されましたが、新聞に「ヴェルサイユ宮殿を模した」と記されたほど優美な姿だったといわれます。



茨城県立水戸商業高等学校旧本館玄関

(2) 茨城県指定文化財

ア 有形文化財

(ア) 旧水戸城薬医門(建造物) (→P80)

佐竹義宣が城主だった慶長年間に創建されたといわれる、現存する水戸城最古の建造物です。

また、水戸城の区画に沿って、土塁や空堀といった遺構が良好な状態で現存しています(茨城県指定記念物(史跡))。



旧水戸城薬医門

(イ) 綿引家住宅(主屋・倉)(建造物)

旧吉田村(現元吉田町)の旧庄屋宅です。木造平屋茅葺きの右土間整形6間取り直屋型で、土間が狭く居住部が広がっています。居住部奥に床の間書院付の座敷があり、室境や縁柱通りには透し彫欄間が見られます。また、たいこ落しの太い梁材を幾重にも重ねた土間部の小屋組の威容などには、村役人としての役柄を示した家屋構成が見られます。また、屋敷内に残る倉庫は、半間毎に柱を建て、貫を化粧にみせ、目板付縦張りの板壁を内側に張ったもので、入口にネズミ返しが取り付けられています。



綿引家住宅(主屋)

(ウ) 六地藏寺四脚門(建造物)

本寺は、山号を俱胝密山、院号を聖宝院と称し、別名「水戸大師」と称する真言宗の寺院です。四脚門は同寺の正門にあたり、2本の本柱の前後にそれぞれ控え柱を建てた造りです。本柱は、角柱で上部を細めに造り、棟まで伸びています。垂木も、室町時代末期の様式にふさわしく、先端に強い反りをつけた造りです。頭貫の木鼻や肘木にみられる絵・繰り形などは市内の薬王院本堂に類似しています。

簡素な造りで、規模も大きくはありませんが、細部様式に室町時代末期の特徴を残しています。



六地藏寺四脚門

(エ) ^{けんぼんちやくしよく}絹本 著色 ^{りゅうとう}流燈 ^{よこやまたいかんひつ}横山大観筆 (絵画)

日本の近代美術の展開を牽引した横山大観の出世作として知られています。1903 (明治 36) 年にインドへ旅行を行った際の体験を踏まえて描かれ、1909 (明治 42) 年に第三回文部省美術展覧会に出品されました。

手・腕・足指などに用いられた朱線や、朱色をつかったぼかし (朱暈) は仏画の手法を採り入れています。縦 143.1cm, 横 51.1cm です。茨城県近代美術館所蔵。



流燈 (部分)

(オ) ^{どうせいぎょうづつ}銅製 経筒 (工芸品)

1687 (貞享 4) 年 ^{かみさきじ}神崎寺 (現天王町) 境内から出土したもので、筒身を円筒形につくる平安時代末期に見られる経筒です。身高 27.5 cm, 口径 18.4 cm, 銅製で、筒身の内側口縁近くに「如法納経/長承二年二月廿三日/法主聖口敬白長口」という 1133 (長承 2) 年の銘文 3 行が浮き彫りされています。

^{まつぼう}末法の世まで経典を保存することを目的としたもので、経筒を発見した神崎寺の住持が徳川光圀に献上しました。光圀は住持らに命じて ^{にょほうきょう}如法経 を書写して経筒に入れ、寺に安置させました。神崎寺所蔵。



銅製経筒

(カ) ^{そうげびきくれないとおどしどうまるぐそく}総毛引 紅糸威 胴丸具足 (工芸品)

江戸幕府初代将軍徳川家康着用と伝わり、水戸藩初代藩主徳川頼房が水戸の東照宮に奉納したものです。兜は、^{そうふくあこだなりすじかぶと}四十八間総覆阿古陀形筋兜で室町時代の優品を利用し、大型の三葉葵紋をすえています。胴は本木礼紅糸毛引威 ^{ほんこざね}で、^{せいちけんご}精緻堅固な作りで、奈良の具足師岩井与左衛門 ^{さく}の作銘があります。

当時の趣向をよく示すとともに、将軍の着料にふさわしい品位を誇るものといえます。徳川家お抱えの具足師岩井派の特色と近世前期の様式をよく伝え、堂々たる風格と格式を備えた具足です。東照宮所有。茨城県立歴史館寄託。



総毛引紅糸威胴丸具足

イ 民俗文化財

(ア) 水戸大神楽（無形の民俗文化財）

水戸大神楽は、1752（宝暦2）年に吉田台町の栗林主計が東照宮の祭礼に神楽獅子として供奉したことを起源とします。1785（天明5）年にその株を譲り受けた足黒村（現・茨城町）の宮内求馬が御用神楽司となりました。

大神楽は、獅子舞によって悪霊を祓い、合わせて曲芸を演じる芸能です。現在は柳貴家正楽社中と柳貴家勝蔵社中が伝統芸能を継承し、その発展に努めています。



水戸大神楽

（左、柳貴屋正楽社中。右、柳貴屋勝蔵社中）

(3) 水戸市指定文化財

ア 有形文化財

(ア) 東光寺薬師堂及び厨子（建造物）

この堂は宝形造で、細部様式は禅宗様を基本としています。梁の上にある龕の背面に1720（享保5）年の墨書があり、建築年代を知ることができます。

堂内の厨子については、1579（天正7）年に再建されたもので、厨子内には、当寺の本尊である木造薬師如来坐像が安置されています。



東光寺薬師堂



東光寺厨子

(イ) 水戸東武館 (建造物) (→P80)

戦後に建てられた建造物ですが、弘道館で学ばれていた北辰一刀流と新田宮流拔刀術(ともに市指定無形文化財)を学ぶことができます。



水戸東武館

(ウ) 木造 神事面 (彫刻)

別雷皇太神は、724(神亀元)年別雷命を祭神として創建された神社です。神事面は散々楽と呼ばれる行事に用いられます。

仮面のうち、1面は猿田彦といい、江戸時代後期製作、もう1面は尉面じょうめんで、江戸時代前期製作と思われます。他の8面は、一具同作で室町時代製作です。比較的小型で、肉薄、彫りが柔らかく技巧に優れます。8面が一組として作られたとすると、八という数から、仏法を守る諸神である八部衆はちぶしゅうの面である可能性があります。別雷皇太神所蔵。



木造 猿田彦

(エ) 木造 菩薩立像 (彫刻)

薬王院の本堂に安置される菩薩立像で、3軀とも針葉樹材を用いた一木造りで、目を直接木造に彫った彫眼ちようがんという技法を用いています。また、木心や節にこだわらず施される彫技すいけいや垂髻すそのかたち、丸々とした面相両脛に左右相称に表した裾すその衣文、天衣の表現などに古い様式を持ち、平安時代後半、11世紀頃の製作とみられます。薬王院所蔵。



木造 菩薩立像

(オ) 大串貝塚出土遺物 (考古資料)

大串貝塚は、1985（昭和 60）年および 1990（平成 2）年に学術調査が実施されており、その際に貝層内から縄文時代前期花積下層式期の深鉢形土器、骨角器、貝刃が出土しました。深鉢形土器は、大量に出土しているヤマトシジミやマガキなどの貝類を煮るため、骨角製の釣針・刺突具は、出土している魚骨や獣骨等の漁撈・狩猟の為に使用されたものと考えられます。これら生産用具の一括資料は、海浜部の集落で展開していた漁撈・狩猟活動の実態を知るうえで重要な資料です。市埋蔵文化財センター所蔵。



大塚貝塚出土遺物

(カ) 日新塾跡出土オランダ陶器 (考古資料)

日新塾跡（市指定の記念物（史跡））から出土した物です。日新塾を主宰した加倉井砂山は、独自にオランダ語を学んだといわれており、その関連が注目されます。市埋蔵文化財センター所蔵。



日新塾跡出土オランダ陶器

(キ) 石河明善日記 附 学制略 1部, 弘道館教育に関する意見書 1部 (歴史資料)

石河明善は、弘道館の訓導・助教を務めるなど水戸藩の学問・教育に尽力した人物です。本資料は、明善による 30 冊に及ぶ自筆の日記です。1852（嘉永 5）年 5 月から 1866（慶応 2）年 11 月までの約 14 年間にわたってほぼ毎日書き継がれており、弘道館に関する記述が多く、幕末の政局や暮らしを知るうえで貴重な記録です。市立博物館所蔵。



石河明善日記

イ 無形文化財

(ア) 田谷の棒術

田谷の棒術の流祖は、関ヶ原の合戦に出陣した佐々木哲斎徳久です。田谷には天明の飢饉を契機に 1783（天明3）年に伝えられたといわれ、那珂川中下流の農・漁民の自衛武術として広がりました。現在はひたちなか市平磯と本市の田谷の2地区に伝わります。本市では田谷の棒術保存会（杖友会）によって伝承され、5尺5寸の丸棒で、いかに太刀に対抗するかを主眼としています。現在、約20種類の型が口述で伝承されています。



田谷の棒術

ウ 記念物

(ア) 義公(徳川光圀)生誕の地(遺跡)

水戸藩第2代藩主徳川光圀(義公)は、初代藩主徳川頼房の第3子として1628(寛永5)年、この地にあった重臣三木仁兵衛之次の屋敷で生まれました。以降5歳の時に頼房の子として認知されるまで、三木夫妻に養育されました。現在は水戸黄門神社として整備されています。



義公(徳川光圀)生誕の地

(イ) 常磐共有墓地, 酒門共有墓地(遺跡)

徳川光圀は、社寺改革の一環として、1666(寛文6)年に常磐村と酒門村の墓地を整備し、藩士に儒葬による簡素な葬祭儀式を勧めました。常磐共有墓地には、安積澹泊・藤田幽谷といった学者や、幕末の改革に活躍した藤田東湖の墓があります。

酒門共有墓地には、奉行として著名な望月恒隆や、幕末に活躍した執政戸田忠徹・同安島帯刀、学者小宮山楓軒などの墓があります。



常磐共有墓地



酒門共有墓地

(ウ) 水戸殉難志士の墓（遺跡）

1864（元治元）年に筑波山で挙兵した天狗党の人々の墓で、1870（明治3）年に整備されました。常磐共有墓地の入口近くにあります。1933（昭和8）年、地元有志によって安政の大獄以後の殉難者と合せて1785柱の忠魂塔碑が建てられ、1969（昭和44）年に回天神社かいてんじんじやとなりました。



水戸殉難志士の墓

(エ) 横山大観生誕の地（遺跡）

明治時代に「日本画」を確立した横山大観生誕の地です。大観は、1868（明治元）年、三ノ町から川崎町の交差する水戸藩武家屋敷地の一角にある水戸藩士酒井家の長男として生まれました。本件は酒井家屋敷の一部で、発掘調査により近世遺構が確認され、17世紀から18世紀前半にかけての陶磁器片などが出土しました。



横山大観生誕の地

(オ) 唯円道場跡伝承地（遺跡）

唯円は、浄土真宗開祖である親鸞しんらんの弟子です。本願寺第三世覚如の伝記『慕婦絵詞』では、1288（正応元）年冬に「河和田の唯円」が京に赴き、本願寺で覚如を指導したと記します。また、『存覚上人一期記』によれば、親鸞の孫唯善が「奥郡川和田」に住み唯円の教えを受けたとされています。報仏寺（現河和田町）の本尊台阿弥陀如来立像の台座に「当寺開基唯円大徳」と銘があり、唯円が開基であることがわかり、本寺の境内の一部が唯円道場跡と伝わります。



唯円道場跡伝承地

(カ) 光藻（植物）

光藻は、単細胞の微小な藻類です。洞穴の中の水溜りなどに群生し、5月から10月にかけて水面に浮かぶと、入射光線を反射して金粉を散らしたように水面が輝きます。本市では、備前町の洞穴を中心に生息しています。



光藻

(4) その他の未指定文化財

ア 有形文化財

本市の中心市街地は1945(昭和20)年の空襲で大部分が焼失しましたが、1930(昭和5)年に弘道館時代に軍事練習場だった調練場跡に建設された「茨城県三の丸庁舎」や、「旧川崎銀行水戸支店」(→P109)など近代以降の歴史的建築物が残されています。



茨城県三の丸庁舎

イ 記念物

江戸時代初期に開削された用水堀「備前堀」は、関東郡代伊奈忠次によって整備され、千波湖から常澄地区を流れ、現在も農業用水路として利用されています。

松本町に位置する「保和苑」は、徳川光圀が大悲山保和院桂岸寺の庭を愛し、保和園と名付けたのが始まりといわれています。昭和初期に地元有志により拡張整備され、名前を「保和苑」と改めました。(→P103)

また、戦国時代以前の城跡も多く残ります。特に江戸氏が水戸城に移るまで居城としていた河和田城(現河和田町)、源義家に攻め滅ぼされた一守長者伝説を持つ長者屋敷(現渡里町)、江戸氏の家臣春秋氏の居城だった見川城(現見川町)などは空堀や土塁といった遺構が良好な状況で残ります。



河和田城跡の土塁

ウ 民俗文化財

「向井町の散々楽」は、向井町(現大工町等)に伝わり、先述の一守長者が滅んだ際に家臣が城にあったささらを持ち出したのが起源という由緒をもちます。

「水戸の盆唄」は、江戸時代から庶民が豊作を祝って太鼓に合わせて歌い踊ったものを今に伝えています。

「石川ばやし」は、無病と豊穰祈願のための祭りが起源と言われ、室町時代から伝えられているとされます。



向井町の散々楽

(5) 日本遺産

2015（平成 27）年に旧弘道館，常磐公園（偕楽園），水戸彰考館跡，大日本史，日新塾跡といった歴史的資源が，文化庁より日本遺産「近世日本の教育遺産群—学ぶ心・礼節の本源—」に認定されました（ほかに栃木県足利市，岡山県備前市，大分県日田市の教育資産）。四市で，教育遺産群の魅力を高める事業を進めています。

(6) 工芸品，菓子・料理等

本市には，水戸藩やその家臣団ゆかりの品々が多く伝わっています。

ア 主な工芸品

(ア) 七面焼^{しちめんやき}

水戸藩第9代藩主徳川齊昭^{とくがわりあき}は，領内の殖産興業の一つとして，1833（天保4）年に水戸城東の瓦谷に陶製所を開設しました。1838（天保9）年に水戸城西の神崎七面堂の南側（現在の常磐神社南側斜面あたり）に陶窯と製品販売所を設置して，瓦谷の製陶所を合併し，七面焼と呼んで陶器と磁器を生産しました。生産は近代に断絶しましたが，市民団体が中心となり，現在復興の取組が進められています。



七面焼蓋付土瓶

(イ) 農人形^{のうにんぎょう}

徳川齊昭は，自ら青銅で作った農夫の像（農人形）を食事のたびに膳に乗せ，最初の一箸のご飯を供えて農家に感謝したといわれています。国の基本は農業であり，農家を大切にすべきという水戸独自の農本主義^{のうほんしゅぎ}から生まれた像で，全国に例を見ない文化です。



農人形

(ウ) 水戸彫^{みとぼり}

寛延年間^{かんえん}（1748年～1751年）に，水戸藩第5代藩主徳川宗翰^{むねもと}が，会津から職人を水戸へ招いたのが始まりといわれます。叩きノミで彫りを行うのが特徴で，刀痕を残す大胆な風合いがあります。

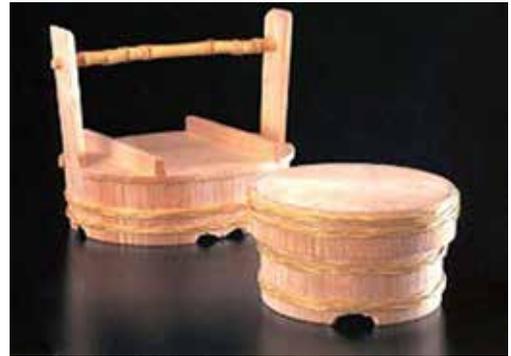


水戸彫

(エ) 水戸^{やなか}谷中の桶

谷中は旧町名で、現在の末広町の一部に当たります。城下の谷中では、桐、檜^{ひのき}、榎^{きわら}、杉、竹など地元産の様々な木を使う桶生産が盛んでした。

現在も、昔ながらの竹の籬^{たが}をはめる伝統技術が継承され、豊かな木の香り、自然の通気性や保湿性を生かした樽や桶が製作されています。



水戸谷中の桶

(オ) 水戸押絵

原画を日本画の線描き技法で厚紙に描き、布で包んで中に綿をつめて、顔の表情や動作にメリハリをつけます。

押絵の技法が生まれたのは鎌倉時代で、世に広まったのは江戸時代に大奥女中が手遊びとして、江戸城のお抱え絵師の下絵をもとに端布を使い、浮世絵、山水花鳥の押絵を作るのが流行して以来といわれており、水戸押絵は100年以上の歴史を持ちます。



水戸押絵

(カ) 水戸^{みとぐろ}黒

寛文年間(1661年～1673年)から始まったとされる染物です。青みをおびた深みのある黒が特徴で、水戸藩第2代藩主徳川^{とくがわみつくに}光圀も愛用したといわれます。大正に入り、輸入された化学染料の普及により断絶しましたが、1975(昭和50)年頃に江戸時代に水戸藩の御用紺屋だった益子家の12代栄寿氏が水戸黒の再現に取り組みました。その後、再度断絶しましたが、現在、改めて水戸黒の再興が試みられています。



水戸黒

(キ) 水府提灯

水戸藩では、藩の経済を支える産業として提灯の製造を奨励したことから、岐阜、八女（現福岡市八女）と並ぶ、日本有数の提灯の産地となりました。

水府提灯は、提灯内側の骨組みを竹ひごで多くの輪をつくり、それらを糸でひとつに結わえるという「一本掛け」の技法で作るため、堅牢であることで知られます。

現在も工法は変わらない一方、既成概念にとらわれない、新しい姿・形をした提灯が製造・販売されています。



水府提灯

イ 主な料理・菓子等

(ア) 水戸納豆

水戸地方では、古くより藁づとで作られた納豆が一般家庭で常食されていました。平安時代後期、源義家の東北出兵の際に、地元の豪族である一守長者の邸（現渡里町）に泊まったおり、義家の家臣が保存しておいた豆が偶然発酵し、それが美味であったため、義家に納めたことから「納豆」という名になったという逸話があります。



水戸納豆

1889（明治 22）年の水戸駅開業以降、駅前や構内で納豆が販売されるようになると、観光客の評判となりました。おいしさの秘密は、小粒大豆を原料とすることにより、独特の風味を持っています。

(イ) 吉原殿中

第9代藩主徳川斉昭の頃、御殿女中吉原が農人形に供えた御飯を乾飯にし、これを煎り、飴、黄な粉でまぶして作ったのが始まりといわれています。



吉原殿中

(ウ) 徳川光圀ゆかりの料理

1967（昭和42）年頃より、水戸藩第2代藩主徳川光圀の料理を再現する動きが始まり、水戸の料理人である故大塚屋子之吉氏が、様々な文献（『日乗上人日記』、『朱氏談綺』、『食菜録』等）をもとに、現代風に再現したものが「黄門料理」です。中国料理の白牛酪（チーズの一種）・チャウツー（餃子）・火腿（中国製ハム）等が市内のレストランやホテルで提供されています。同様に、『朱氏談綺』に記された食材や料理方法をもとに、光圀が食したとされるラーメンを現代風に再現した「水戸藩らーめん」があります。



黄門料理

(エ) あんこう鍋

本市をはじめとする、茨城の冬の代表的な郷土料理です。茨城の沖合いでとれる鮫鱈は“関東のふぐ”と賞賛されるほど美味で、江戸時代には、幕府への献上品としても知られていました。肝を混ぜただし汁のうま味とコクが人気を博しています。



あんこう鍋

(オ) 那珂川の川魚

本市を流れる那珂川では、豊富な川魚が穫れることもあり、水戸の名物として珍重されています。

鮭は、江戸時代には朝廷や幕府への献上鮭として重用されました。水戸藩では初鮭に報奨金を与え、江戸の将軍家に早馬で献上したといわれています。現在も、市内の川魚店などで取り扱われており、小ぶりで淡白な味わいが人気を得ています。

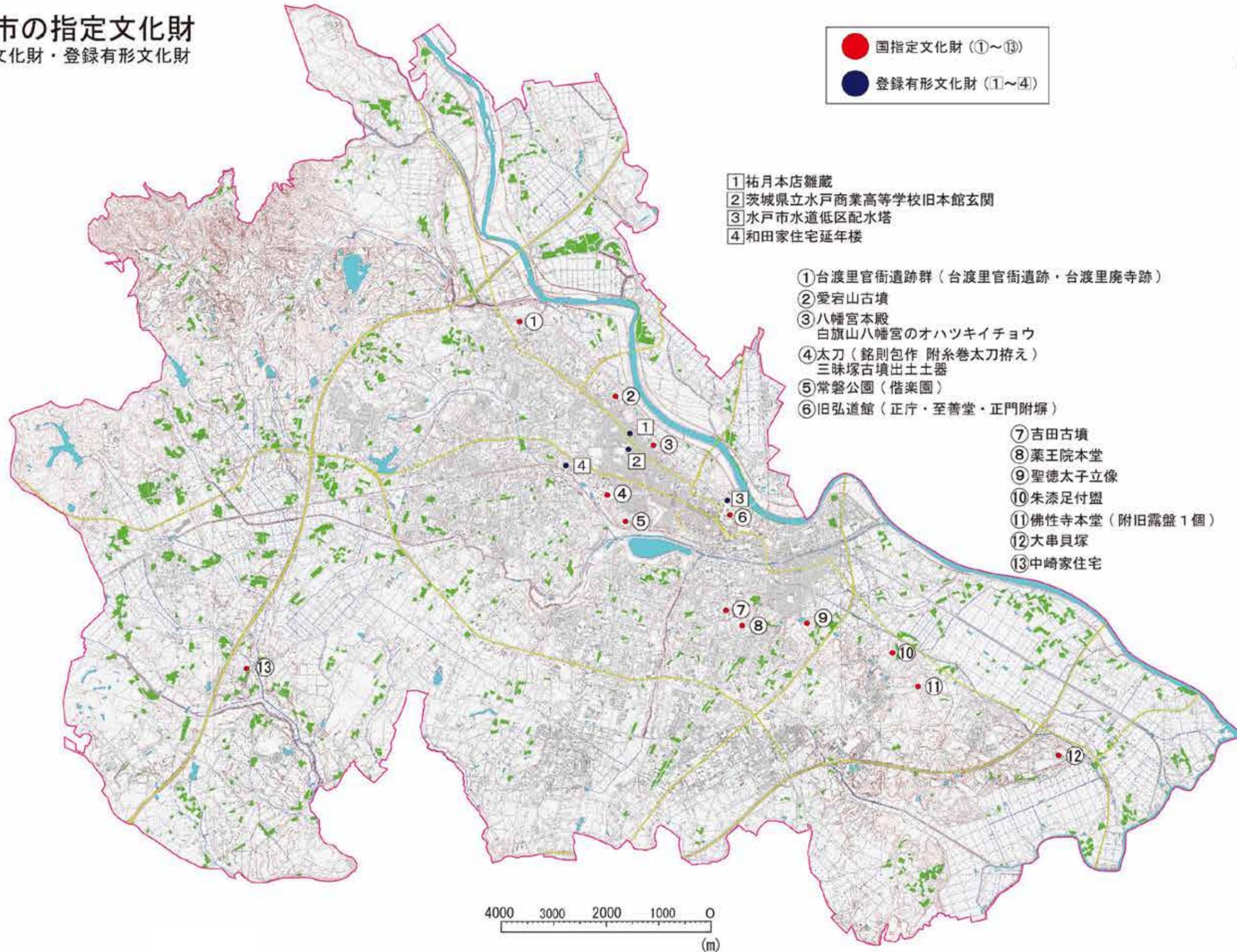


鰻料理

また、鰻料理は本市の名物となっており、本市には多くの鰻料理店があります。

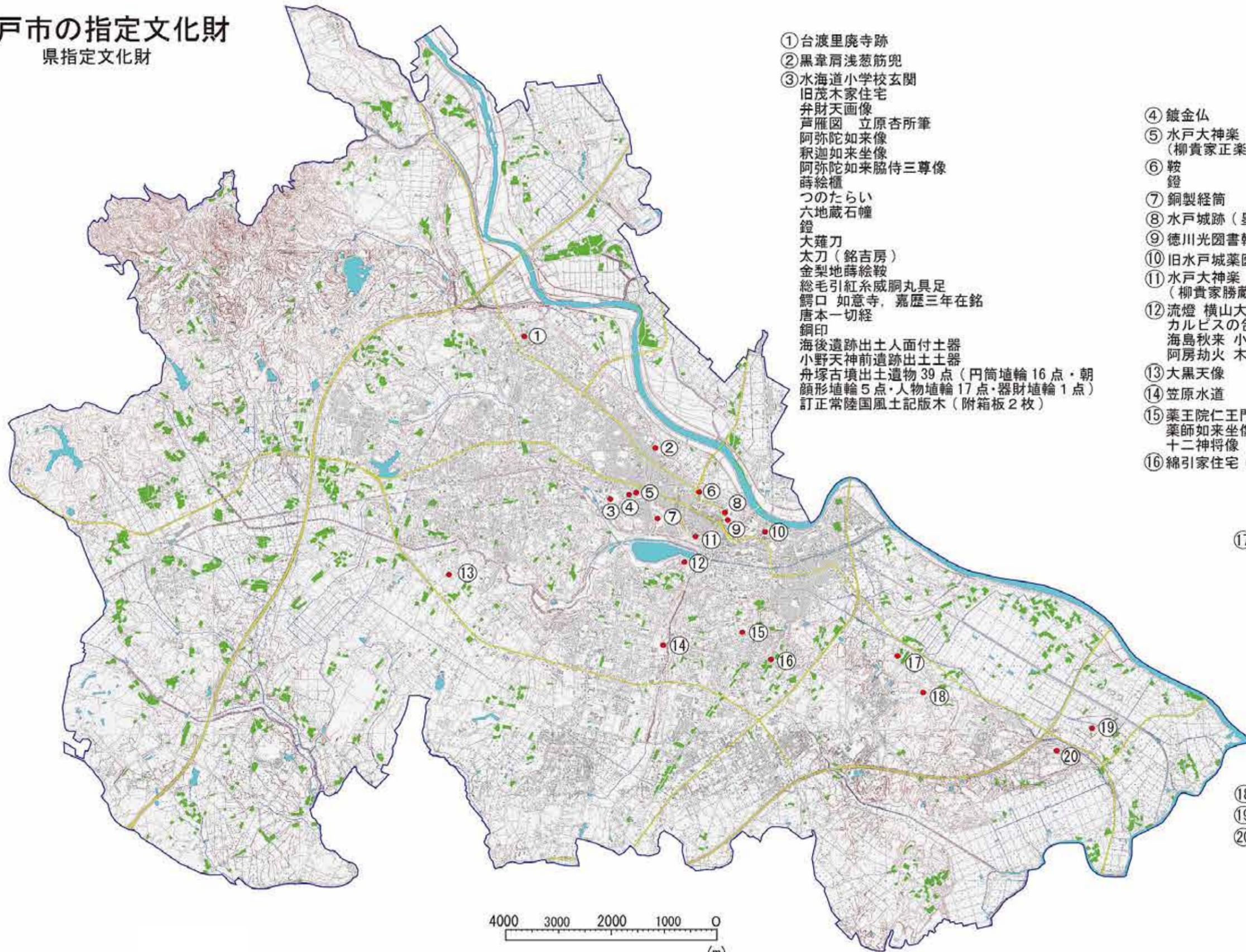
水戸市の指定文化財

国指定文化財・登録有形文化財



水戸市の指定文化財

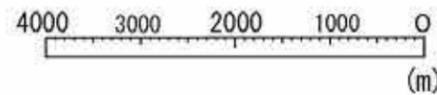
県指定文化財



- ① 台波里麁寺跡
- ② 黒韋肩浅葱筋兜
- ③ 水海道小学校玄関
旧茂木家住宅
弁財天画像
声雁図 立原杏所筆
阿弥陀如来像
釈迦如来坐像
阿弥陀如来脇侍三尊像
蒔絵櫃
つのだらい
六地藏石幢
鎧
大薙刀
太刀 (銘吉房)
金梨地蒔絵鞍
総毛引紅糸威胴丸具足
鰐口 如意寺, 嘉歴三年在銘
唐本一切経
銅印
海後遺跡出土人面付土器
小野天神前遺跡出土土器
舟塚古墳出土遺物 39点 (円筒埴輪 16点・朝顔形埴輪 5点・人物埴輪 17点・器財埴輪 1点)
訂正常陸国風土記版木 (附箱板 2枚)

- ④ 鍍金仏
- ⑤ 水戸大神楽 (柳貴家正楽社中)
- ⑥ 鞍
鎧
- ⑦ 銅製経筒
- ⑧ 水戸城跡 (壘及び濠)
- ⑨ 徳川光圀書翰集
- ⑩ 旧水戸城薬医門
- ⑪ 水戸大神楽 (柳貴家勝蔵社中)
- ⑫ 流燈 横山大観筆
カルピスの包みのある静物 中村彝筆
海島秋来 小川芋銭筆
阿房劫火 木村武山筆
- ⑬ 大黒天像
- ⑭ 笠原水道
- ⑮ 薬王院仁王門
薬師如来坐像
十二神将像
- ⑯ 綿引家住宅 (主屋・倉)

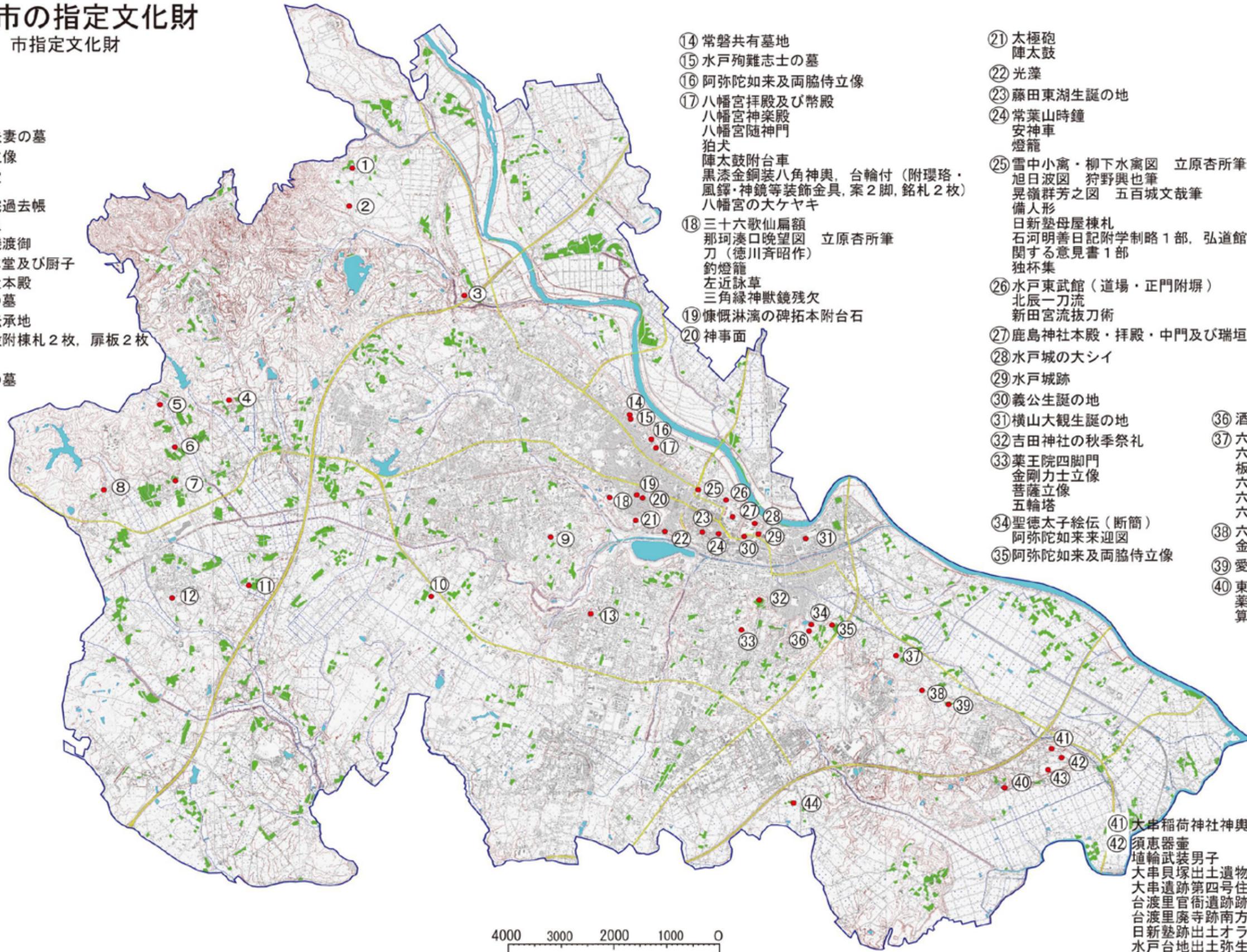
- ⑰ 四脚門
両界曼荼羅
弘法大師像
真言八祖像
十二天立像
六字経曼荼羅
十三仏図
釈迦十六善神図
制吒迦童子像
灌頂用具
密教法具
銅装龍輪宝羯磨文戒体箱
銅装龍輪宝羯磨文説相箱
銅板貼山伏笈
漆塗経櫃
六地藏寺所蔵典籍・文書
神皇正統記 六地藏寺本
- ⑱ 大日如来及三十日仏坐像
- ⑲ 大野のみろくばやし
- ⑳ 大串のささらばやし



水戸市の指定文化財

市指定文化財

- ① 日新塾跡
- ② 加倉井砂山夫妻の墓
- ③ 阿弥陀如来立像
- ④ 和光院不動堂
不動明王像
傳燈山和光院過去帳
- ⑤ かたくりの里
- ⑥ 有賀神社の磯渡御
- ⑦ 中原不動尊本堂及び厨子
- ⑧ 杉崎八幡神社本殿
- ⑨ 武田耕雲斎の墓
- ⑩ 唯円道場跡伝承地
- ⑪ 春日神社本殿附棟札2枚、扉板2枚
- ⑫ 石枕・立花
- ⑬ 会沢正志斎の墓



- ⑭ 常磐共有墓地
- ⑮ 水戸殉難志士の墓
- ⑯ 阿弥陀如来及両脇侍立像
- ⑰ 八幡宮拝殿及び幣殿
八幡宮神楽殿
八幡宮随神門
狛犬
陣太鼓附台車
黒漆金銅装八角神輿、台輪付（附瓔珞・風鐸・神鏡等裝飾金具、案2脚、銘札2枚）
八幡宮の大ケヤキ
- ⑱ 三十六歌仙扁額
那珂湊口晚望図 立原杏所筆
刀（徳川齊昭作）
釣燈籠
左近詠草
三角縁神獸鏡残欠
- ⑲ 慷慨淋漓の碑拓本附台石
- ⑳ 神事面

- ㉑ 太極砲
陣太鼓
- ㉒ 光藻
- ㉓ 藤田東湖生誕の地
- ㉔ 常葉山時鐘
安神車
燈籠
- ㉕ 雪中小禽・柳下水禽図 立原杏所筆
旭日波図 狩野興也筆
晃嶺群芳之図 五百城文哉筆
備人形
日新塾母屋棟札
石河明善日記附学制略1部、弘道館教育に関する意見書1部
独杯集
- ㉖ 水戸東武館（道場・正門附塀）
北辰一刀流
新田宮流抜刀術
- ㉗ 鹿島神社本殿・拝殿・中門及び瑞垣（附設計図9点）
- ㉘ 水戸城の大シイ
- ㉙ 水戸城跡
- ㉚ 義公生誕の地
- ㉛ 横山大観生誕の地
- ㉜ 吉田神社の秋季祭礼
- ㉝ 葉王院四脚門
金剛力士立像
菩薩立像
五輪塔
- ㉞ 聖徳太子絵伝（断簡）
阿弥陀如来来迎図
- ㉟ 阿弥陀如来及両脇侍立像
- ㊱ 酒門共有墓地
- ㊲ 六地藏寺本堂（地藏堂）
六地藏寺法寶蔵
板碑
六地藏寺のスギ
六地藏寺のイチヨウ
六地藏寺のシダレザクラ
- ㊳ 六地藏
金剛力士立像
- ㊴ 愛宕山古墳のコブシ
- ㊵ 東光寺薬師寺堂及び厨子
薬師如来坐像
算額

- ㊶ 大串稻荷神社神輿並びに日月鉢
- ㊷ 須恵器壺
埴輪武装男子
大串貝塚出土遺物
大串遺跡第四号住居跡出土遺物
台渡里官衙遺跡跡出土銅印
台渡里廃寺跡南方地区第1号工房跡出土資料
日新塾跡出土オランダ陶器
水戸台地出土弥生・古墳時代折衷土器群6点
- ㊸ 宝篋印塔
- ㊹ 千束原追鳥狩本陣跡

